なゐと思ひまして、一錢も殘さず、京都の御本山本願寺へ献納しましたと云ふことである。

清九郎の養子久六は、もと博奕を好み、人と爭ひ村人にも指彈せられた程の惡人でありましたゆへ、清九郎がこれをもらいました時、皆の者は清九郎の爲めに、ふかく心配しました處、清九郎の德、自ら此人を感化したものであろうか、多くの月日を立たぬ間に、久六の素行、サッパリと改りて、其上深く道を信じ、佛恩を喜び、又清九郎を大切にする樣になりました、

越中の玉譚、清九郎の德を慕ひ、眞摯な感化を其地方に及ぼしたいと思ふて、強いて清九郎を其國に招きました、七十歳に

もなる老人、百里の道を旅して少しもつかれたとは云はぬ、玉譚が時々いたわりをするを、「身體はくたぶれましたが、心は少しもつかれませぬ、形は七十、心はいつも十八であります」と申しました、國に歸るとき、攝津の泰巖が同道せられた、道で強いてすゝめて馬に乘せましたれば、馬上、いさましく御名を唱へながら、次の驛について馬より下り、粉糖を五升ほど求めて馬子にわたし、これを馬に與ゑくれよと云ふて懇ろに馬の背をなでゝ別れました、

清九郎、國へ歸りてより二年程を經て、實延二年の冬、中風にかゝりました、それより次第につかれまして、起臥も不自由

でありました、而も其間も稱名の大行を少しも疎かに致しませなんだが、遂に寛延三年の八月四日、七十三歳で靜かに終りました、

わづかなる庭の小草の白露を
求めてやどる秋の夜の月

と西行法師の詠ぜられた如く、賤しく愚かなる清九郎の胸の中に、盡十方無碍の光明は宿り玉ふたのである、妙好人傳の著者たる仰誓師は、清九郎の傳を書いて、其終には、生前には我名の書付をさゝる讀むことが出來なんだ人であるけれども、今は百法明門を得て、無量の智慧ある聖者となりて居らるゝことで、あろうと申して居られまする、人は侮るべからず（三小話）

一　芭蕉庵

世に名高き俳諧の祖師とも仰ぐべき、芭蕉庵桃青は、元祿年中の人にて俳諧修行の爲め諸國行脚の折柄、ある邊鄙へ至り、此所彼所と巡回せられしが、頃しも八月十五夜、月一天に澄みわたり、皎々として照りかゝやき、白日にも猶勝りて、イト興あれば強ちに宿をも求めず、歩行れけるに、其村里の者大勢集りて、月見の宴と思しく、酒肴を以て興を催し、四方の景色を打ち詠め、頓て俳諧を始めました、芭蕉翁は此有樣を見て、

サテハかゝる片田舎にも、猶風流の學びをなしけるよと、イトたのもしく思はれて、傍らに彳み暫く打詠めて居られた、其座中にあるイトれこがましき男が之を見付けて、「彼所に立つは行脚の僧と見ゐる、但し乞食坊主かはしらねども、暫しこゝへ呼び入れて、相手にせんは如何に」と云へば、一座の者ども「それはよき興にこそあれ」とて、頓て翁を招き入れんとすれば、翁は辭する貌もなくやれら末座にかゝみ居て、人々の吟詠を聞き居た、彼のれこがましき男が翁に向ひ、「足下も此席に連るからは、明月の句を吐て興を添へ一句致されよ」と申した、翁はワザと辭退して「貧道は野外の小人、爭でか諸君の中に交はり興を添へんや、許し玉へ」と詫ければ、彼等は一向聞入れず、發句はたとへ善くとも惡くとも一句吐かぬと云ふことがあるか、イザ〳〵とせめければ、翁はニッコと笑ひ、袖かき合せ、「さらば一句仕ちらん、それへ書き付け玉へ」と云ふに、一人の男が筆を執り詠草に打向へば、其時翁は徐かに、

三日月の
と上五文字を吟ぜられた、一座の人々これを聞て、カラ〳〵と打ち笑ひ、今宵は明月なるに、三日月とは、サテは物知らずの法師かな」と一人が云へば、次の男が「其樣には云はぬもの、これも一座の興にこそ」と翁が前後に立寄りて、嘲るもあり、

笑ふもあり、イト囂々と口々に云ひけるが、翁は夫等に耳をも止めず、

三日月のころより待ちし今宵かな

と吟じ終へば、忽ちア、と感じ入り、皆驚いて前後左右に座を正し、「さて貴僧は只尋常一樣の法師なりと思ひしに、かゝる秀句を吐き玉ふは、如何なる人ぞ名乘り玉へ」と申ければ、「我は芭蕉庵と呼ばるゝものなり、俳諧修行の爲めかくは行脚を致すなり、各々方も斯道を嗜み玉ひて、優しくも月見の筵を開き玉ふは目出度きことなり」と聞いて、一座の者は二度ビックリ「さては芳名隠れなき芭蕉翁にて御在せしか、先刻よりの無禮許し玉へ」只管詫びて、それより一郷の風雅を好む老若に告げ知らせ、共に呼び集て新たに筵席を開き厚く敬ひたりと云ふ、此れは名高き話にて、世の中の人の普く知る處ぢや。

二　花園左大臣の若黨

花園左大臣の御邸へ、或時召しかゝへられた若黨は、名札の片書に「能は歌詠み」と書いてありた、折しも秋の初の頃、左大臣南殿に出ひ玉ひて月を賞し玉ひしに、庭前の叢の中に促織虫の鳴き居りければ、彼の「歌詠み若黨」を召して、「汝は歌詠とあれば、促織蟲を詠じて、一首差出せよ」と仰せられたかの若黨が

青柳の……

と、初の句を詠み出せば、左右に傳き傍ふ女中がこれを聞て、青柳は春のものにて時候にあわぬと思ひけるにや、ホヽと笑ひ出しければ、流石の左大臣にて「始終を聞き得すして笑ふは不都合なり」と女中達を戒め、疾く次を詠めと仰せられたれば、

青柳のみどりの糸をくりれきて
夏經て秋ははたれりぞ鳴く

と詠み終れば、左大臣深く感じ玉ひて、卽座に萩の模樣を織りたる垂衣を賜はりた、初めに嘲り笑ふたる女中達も、面目なく耻入りたとある、

三　友則

寛平の歌合せに、友則と云ふ人、「初鴈」を詠ずるに、

青かすみかすみていにしかりがねは
今ぞなくなる秋霧の上

と詠める、初の五文字「青かすみ」と詠せし時、人々聲々に笑ひしが、次の「かすみていにし」と云ひければ、一座音もせずなりて、詠み終るを聞て、皆感じたりと、古今著聞集の巻の第五に載せてある、

二六　祇王祇女と佛御前

平の清盛と云へば誰知らぬものもなき程の人にて大層に驕を

極めましたが、其頃京都に祇王祇女と申す白拍子が居りまして姉の祇王は取りわけて姿も美しく藝もよいと云ふので、清盛の寵愛をうけて西八條の邸にかゝゑられて居りました、然るに加賀の國より又一人の白拍子が上りて來ました、その名を佛御前と申して、年も若く今樣の歌から舞の手まで妓王より一層よい と申すので、京洛中の大評判でありましたが、一日西八條の邸にゆきて清盛に逢ふと致しました、しかるに清盛は祇王のあるのに誰が來やうとも用事はなゐと叱り付けて追ひ出そうとしたのを、妓王がとめて「其樣に無非道に仰せられずとも、何か一曲奏てさせ玉へ」と申したゆへ、「然らば」とて佛御前を通して

一曲を彈かせて今樣を歌はせられた處が、器量と云ひ音聲と云ひ、妓王よりは一段よろしい處から、清盛は遂に佛御前に心がうつり、妓王に暇をやりました、妓王もさて〳〵情なゐ仕合とは思ひましたれども、詮方なく障子に

萌ゑ出るも枯るゝも同じ野邊の草
いづれか秋にあはではつべき

と云ふ私歌を一首しるして引取り、餘り哀しさに死なんとは思ひましたれども、母の切なる諫により、思ひ止りて居る内に清盛の許より、佛御前の徒然を慰むる爲めに、邸に來りて今樣なりとも歌へよとの命がありまして、妓王はやむなく屠所の歩

みで邸にまいりましたれば、「こちらへ」と奥の間にでお通されるかと思ひの外、遥か下の方に座らせられて、佛御前とは同席もならぬ悔しさに、胸もはりさける思ひをチット押へて、はやく歌へ〳〵との言葉にやむを得ず、

佛も昔は凡夫なり
我等もついには佛なり
同じ佛性具する身を
隔つるのみぞ悲しけれ

と云ふ今様を歌ひましたれば、満座の人々袖をしぼらぬはなかりたと申します、

妓王は斯くてあらば、この後如何なる憂目にあふも知れぬと覺悟を定め、妹の妓女と母と三人、一所に黒髪を斬りて尼となり、嵯峨野の奥に引き籠り、草の庵を結んで、念佛三昧に日を送りましたが、佛御前も、妓王が障子にかきれいた「いづれか秋にあはでは つべき」と云ふ和歌や、先の今様などを思ひ合して、自分の身も何時かは妓王の樣に追ひ出さるゝに相違なゐと心がつき、其年の秋の暮に、窃かに邸を逃げて嵯峨野なる妓王が邸を尋ねゆき、心のうちを打ち明けて、四人一處に念佛三昧の身となり、目出度往生を遂げられたと云ふ話があります、これは佛も凡夫も同一佛性を具して居ると云ふ、即ち平等の理を

證りて、かゝる憂き目に遇ふても身を誤らず、却て自分の仇ども云ふべき佛御前まで發心させたのである、これは佛敎上の感化美談として大に賞讃すべきことの隨一であります、

二七　伊東中將と丁汝昌

不妄語戒を持つる例證として、近世の佳話を左に掲げること致しませう、二十七八年戰役の當時、有名なる丁汝昌が伊東海軍中將に向ふて降參をした時分に、「若し此方に御疑ひがあるならば英國公使を以て證人に立るから、此方の降參を納れてくれる樣に」と、伊東中將へ使を以て申込みましたが、言を食むは支那人の持前だと云ふので、此方にも一應あやふんだけれども、流石は伊東中將である、「よろしい、降參は聞届けた、英國公使の證人は無用である」と、斯う云ふて丁汝昌の一言を十分信じて、向ふの條件をきゝ入れてやりましたから、如何に虛言の名人たる支那人も、こゝに於ては欺くことは出來ません、丁汝昌が己の一命を拋つて部下にある多くの兵士を助けたは實に千古の美談と云ふ者であります、もしや丁汝昌に欺く心があり降參を申込んだならば、降參を遂げられぬのみならず、多くの兵士をしてあはれはかなき最後をさせねばならなかりたので御座います、戰爭中には支那人に澤山死人もありたであるが、彼の丁汝昌の死と云ふものが、支那の泰山よりも高かりたと云

ふ者は、只欺かぬと云ふのでありました、如何に豚尾憎い奴であると云ふても、丁汝昌の傳を讀んでみると、如何なるものでも泣かずに居られなゐ位でありますし、してみますれば、欺かず僞らぬと云ふ不妄語の力は中々恐らいものではありません、人を欺くはつまり已れを欺くので御座いますが、自分で自分を欺くより馬鹿なことはなゐのであります、

二八　熊澤蕃山と中江藤樹

筑波山はやましげやま繁けれど
思ひ入るにはさわらざりけり

こゝろざし　ある人には困難と云ふ事がなゐ、筑波山のしげりはよし深く見ゐても、いよ〳〵踏み込んでゆく段になると何の障りもなゐと同じと云ふことで、しげやまを字にあてた蕃山を名乗りとして居た人は誰ぞ、姓は熊澤、名は了介、又の名を伯繼と云ふ人でありた、この人は幼少より備前岡山の池田侯の御近侍でありて、ナニ不足なく育つたが、或時、學問をするには師とたのむ人がなくてはならぬと思ひ、誰かれと諸方を尋ねて京都に至りて、大志を抱いて知已なく空しく又一夜の旅宿でれくるかと蕃山は行燈の影でつく〳〵思案の姿でありたが、フト同宿の人の話を聞けば語りて云ふやう、

「感心なこともあるものです、私は主人の用事で旅をしま

した時、馬に乗りて主人の金二百両を鞍にくゝりつけてれきました、日暮に宿にとまりて其金包を取り入れるのを忘れて憶れたまゝ竟に寢込んでしまいました、夜半に目がさめていろ〳〵と畫の事を考へて居ると、始めて金包を遺れてれいたことを思ひ出した、もしや夢ではなゐかと氣をつけるに隨つて、いよ〳〵實際である、サアどうしよう、と云ふたとて今更返るものでなし、主人には申譯がなゐ、モハヤ此上は死んで詫るより外に法がなゐ、しかし死ぬるとすれば、國許の親達は如何思召すであろうなど、種々の嘆が叢り來るとき、表の戸をあはたゞしく敲く音がした、何事であろうと思ふ中、「誰ですか」と尋る聲に應へて、「私は先刻此方の御客を送り屆けた馬方です、かへりて馬を洗らふと思ひ鞍を下した處が、此金子の包がありたですぐ跡引かへして急ぎて今御返しに來た」とのこと、あまりのうれしさに何と禮をのべてよいやら、まづ兎も角御苦勞の御禮と、持合せる十六両を取り出して渡そうとしても中々聞入れなゐ、あなたの物をあなたに返すに何の謝禮がいりませう、只私が夜中にこゝまでまいりた駄賃二百文下されば充分と云ひ張り禮金など受取りそうにもなゐ、あまり不審にれもい、「世の中には義理を忘れて慾に迷ふものもあるに、馬方風情の賤しき職をしながら、金錢の慾寡なひ御前さんの樣なは感心である」と申

せば、馬方の云ふには、「私の村に中江與右衛門といふ人があ
る、常々私共を敎へて下さるには、人の高下は職業で別かれ
るものでなく、道を守ると守らぬとによりて、ちがふて來ると
のこと、私は貧乏して居ても、其道にはづれたことは出來ま
せぬ」とて其儘跡をも見ずに立去りてしまふたと話された、
この仔細の物語りを聞て蕃山はハタット膝をうち、我師匠と
仰ぐべき人は其中江與右衛門であろうと、翌日匆々身仕度をし
て中江氏を其郷里西江洲にたづねてまいりた、中江氏とは世に
近江聖人と云ふ藤樹先生の事である、蕃山はわざ〳〵藤樹の許
に至り弟子入りをたのんでも、「我は人の師となることは出來ぬ」

と斷はられ、すご〳〵立ち去りたれど、深く思ひ込んだ蕃山は
復更に立戻り復更に斷はられた、しかし今度は其所を去らなゐ
で、藤樹先生の廡の下に荒莚を布しいて三日三夜ねをきして動
かなかりた、藤樹の母は之を見て氣の毒にれもい「あれ程まで
に熱心して居る人に、た前の知りてれることを敎へたからとて
差支なからう」と云はれるので、始めて家にあげて弟子とした
響の聲に應ずるが如しとは此師弟の間柄で、藤樹克く敎へ、蕃
山克く呑み込み、意氣投合の有樣でありましたとのことである
これ師を求むるの切にして、弟子を敎ふるの至れるもの、吾人
の大に學ぶべき芳跡の隨一ではありませんか、

二九　價値ある一言（五節）

一　明惠上人

栂の尾の明惠上人は學德共に高く、識見もなみ〳〵ならぬ高僧でありて、北條九代中尤も賢者と云はれる泰時なども、上人より常々敎へを受けて居た、又當時豪氣あたり難き文覺上人はこの明惠上人の師匠であるが、上人にはつねに閉口して居られた、その位な明惠上人が我々の爲めに生涯守るべき一言を殘してれいて下された、それは「アルベキャウカ」と云ふ短かい詞にすぎなゐ、しかし此語がどの位尊いかは上人が書き置かれた、

人はあるべきやうはと云ふ文字を持つべきなり、僧は僧のあるべきやう、俗は俗のあるべきやうなり、乃至帝王は帝王のあるべきやう、臣下は臣下のあるべきやうなり、このあるべきやうを背くゆへ一切惡しきなり、

二　井伊直孝

寛永の頃永井尙政と云ふ人が時の大老井伊直孝に出遇ふて云はれるに、「拙者の如き若年のものが、上の御恩にて段々重き役に取り立てられ、恐れ多く思へば、あなたの樣な老功の御方に何か身の心得になることを承りて守りたし」と申されたれば直孝の答へられるには「それは善き御考なり、いかにも某が

一つ存じてゐることがあるから、御傳授申さふ、されど大切な事柄ゆへいよ〳〵御聞になりたいとあらば、某の宅へ御越しになれ」と云はれた、そこで尚政は日を定めて禮服をつけて井伊の宅へ行かれたるに、直孝出て迎へて一間に通し云はるゝには「世間に油斷大敵といふ言があるが覺へて御座ろう、この一言の外、某が御傳授申し上るとなし、必ず御忘れめさるな」

三　志貴瑞翁

志貴瑞翁と云ふ人は、百餘歳まで生き長らへて、尚壯健であり、或人が懇に長命する秘傳を授けられたいと願へど惜しそうに敎へなゐから、其人がますゝ聞きたがりてやまなゐ、瑞翁さらば七日間精進した上で來れと云はれたり、其人之に從ふて七日すぎて至りたるに、未だ足らぬから、モウ三日精進して來いとかへしやり、又其日になりても尚一日精進せよと返されたり、さて其日になりて瑞翁衣服を改め、其人を一室に案して近く膝さしよせ、小聲になりて云はれるには「氣をながく御待ちなされ」と、

四　劉安世

劉安世と云ふ人、司馬温公に尋ねらるゝに、人が一生踐み行ふべき道は何でありませうと、温公答へらるゝに、それは「誠」でありませうと、そこで劉安世問ひ返さるゝには、誠を行ふに

は何が一番さきにたちますか、温公の曰はるゝに、虚言をつかないのが最も先でありますと、

五　ロスチャイルド

ロスチャイルドは賤しき身分より起りて、歐洲第一の金満家になられた、それゆへにこの人の一生涯の物語は色々の事もあるが、或時、人があなたの非常の財産家となられたは、何か一つの秘傳があるのでせう、ドーカ教へて頂きたいと思せば、ロスチャイルドは答へられた、私に一の心得がある、それは、何事によらず人の爲ることは必らず自分も出來ると云ふだけですが、私は一生涯、唯この一の手製格言を守りたばかりです、

と、

三〇　連城の璧と廉頗藺相如

昔支那に連城の璧と云ふて有名な寶玉がありました、茲にこの玉の由來を御話申しませう、

楚の卞和と云ふ賤いものが、日々畑を耕して居ました處が、或日、まわり一尺ばかりの石を見出しました、卞和は此石を磨いたならば必ずよき玉となるであろうと思ふて、楚の武王と云ふ王様に此石を献上しました、武王は喜び玉磨を召して此石を磨がせましたが、少しも光りが出ません、玉磨「これは玉ではありません、普通の石であります」と申上たものですから、王

は怒つて卞和を呼び出し、其左の足を切り石を背に負はせて、楚山のうちに追ひ放ちました、卞和は楚山に小屋を造り石を負ふて泣いてゐりました、然る處三年を經て、武王は御崩れになり、文王が御位につかれまして、圖らずも楚山へ狩に御出になりました、すると小屋の中に泣聲が聞えますから、王は怪みて其理由を御尋になりた、

卞和、「私は玉なるべき石を見出して、先代の王樣に献上いたしましたが、玉磨どもが、普通の石であると申立たものですから、私は御咎めを蒙り、足を切りて捨てられました、願くは大王、尚一度此石を磨かせて下さい」と申上ました、文王又磨かせて見ましたが、矢張り光が出ませぬから、卞和の右足を切りて、石を負はせて楚山に棄てました、

卞和は血の如き涙を流して深く悲しみましたが、其中に二十年ばかり過ぎました、尚石を負ふて泣いて居ります、

文王も亦御崩れになる成王の御代となりました、成王も或時楚山に狩して、小屋のほとりに近きましたから、卞和は石を負ふて這出し、泣く〳〵も二代の君に両足を切られたことを訴へ願くは此石を猶ほ一度磨かせ玉へと申上げました、

成王は持たせかへりて磨かせて見ました處が、遂に天地を照す樣な光を放ちました、之を路にかければ車十二乘を照しまし

たから、照車の玉と名けました、又之を宮殿に懸ければ、夜十二町を照しましたから、夜光の玉とも云ひました、これより此玉は代々天子の御寶になりて、遂に趙の國に傳はりました、ケ様に古今稀なる名玉でありますから、

趙氏連城の璧
由來天下に傳ふ

などゝ、唐詩選などに出てれりまする位な名高いものとなりました、然るに其頃秦の國は非常に勢力を擅に致しまして、とう〳〵齊楚燕韓魏趙の六國を亡ぼした國で御座いますが、未だ其六國を亡さぬ以前に、趙と云ふ國は誠に小さい國でありましたから、秦は勢ひに任して、彼の趙の國の重寶たる名玉を此方へ差出せば、其代りに秦の十五城を與へるから呉れよと云ふて來た、然るに趙の國に於ては、又秦の國からア、云ふ難題を申込んで來たが、飽くことを知らぬ虎狼の秦なれば、遂には夫を云ひたてゝ、國も諸共に取ろうと云ふのであろうが、約束通りに璧を渡せば、璧だけ取り上げて十五城は呉れなゐことは、鏡にかけて見るよりも明かであるが、さて〳〵困りたものであると、非常に心配して居りましたが、丁度其時分に藺相如と云ふ大層剛氣な人がありて云ふには「其分ならば不肖ながら、拙者が寶玉を奉じてまいりまして、若も十五城を呉れなからたなら

ば　此寶玉を渡す氣遣ひは御座いませぬから、決して主命を辱めると云ふことは致しません」と、彼の夜光の璧を持てまいりまして、秦王に拜謁して璧を差出した所が、秦王は璧を受取りて、成程聞きしに違はぬ名玉である、これは珍らしい者だと、彼方にコロ〳〵此方にコロ〳〵と轉がして、御側に居る女中共に見せて、ア、だコウだと璧の論量が始りた、そうすると藺相如は秦王の顏ンきをジッと見つめてゐましたが、璧は取ても決して城は渡さぬと云ふ景色かみゑたものであるから、スハ一大事と決心して、「一寸王樣に申上ますが、其璧には少し疵が御座いますから、献上するからには御知らせ申してゐきたいから、一寸御渡し下され」と、女中がまわして居るのを受取りて、手に取るや否や、髮を逆て眼を怒らして申しますには「怪しからんことである、拙者が此度秦の國まで參りたは、此璧は國の重寶なれば、齋戒までして持て來たものである、然るに穢はしい婦人共に與へて弄り物になさるからには、必ず十五城を以てかへる丁簡はあるまい、此相如が黑い眼で白眼だに相違なゐ、一命をかけて參りたからには、早速十五城を渡すか、さなくば此璧を返すか、何れなりとも返答きかねば、決して此處を退くことは致しません、拙者は此璧と共に摧ける」と云ふて柱によりて動かなんだ、そうすると流石虎狼と云はるゝ秦の人々も、藺相

如の剛氣にあきれて、一人も手を出す者は無りた、藺相如は其間に連れて來た人にソットと璧を持たせ、急いで趙の國へ歸へして仕舞、あとより自分は悠然と歸りましたが、其功によりて上卿の位にあげられました、然るに此時には趙に廉頗と云ふ人がありまして、これも矢張り將軍で、これ迄大變な功を立てた人でございましたが、此度藺相如が秦に使して一飛に上卿になりたと云ふのを非常に妬んで、「オノレ藺相如、今度非常な立身をしたが、未だこれまでさしたる功もなゐが、我れ廉頗の如きは、攻城野戰の功を積んで漸く大將になりた、彼れは僅か三寸の舌頭を以て、一遍の使で我が上になりたとは、甚だ不都合極りた次第、見付け次第一打にしてくれん」と、斯う云ふてれりましたが、其事が藺相如の耳に這入りましたから、途中で廉頗將軍の馬車が見ゐると、御者に命じて避ける樣にいたし、又朝廷に出勤するにも、廉頗が出る時分には出なゐ樣にして居りました、そこで御者が驚いて「サテ相如には廉頗の樣な者にケ樣に恐れなさるとは怪しからんことでは御座らぬか」と申したところが、藺相如の云ふには、「馬鹿なことを云ふものかな、苟にも虎狼と云はるゝ秦の國へ使して、秦王を初めとして百官百僚を罵倒しぬいた此藺相如、一人の廉頗位なものに恐れはせんが、只もしも秦から戰爭でもしむけた時には、廉頗があり

て之と戰はねばならぬ大切な一人、然るに今其廉頗と此藺相如と私の爭を以て喧嘩を始めたならば、どうせ一人は死なねばならぬ、兩虎共に戰へば必ず一傷ありと云ふ、そうなりた時には趙は忽ち秦より滅されて仕舞う、廉頗一人を恐るゝではないが、唯此趙の國の爲めに恐れるから、廉頗と爭をせぬのである」と申しました、スルト其事を廉頗がきゝまして、流石の相如、えらい者だと非常に感心いたして、ケ樣な忠臣を害せようとしたは私が悪るかりたと、直に藺相如の處へ行て、諸肌を脱ぎ荊の杖を背負ふて謝罪を致しました、この杖を背負ふのは悪るかりたによりて、この荊の杖にて打擲して下されと云ふ意にて、謝罪の式であります、さて相如の方では、イヤ決して左樣なことには及ばぬと云ふので、とうゝ死なば諸共にと云ふ程な、刎頸の交りを結んだと云ふことで御座います、さてこの藺相如が璧に疵があるから一寸渡してくると云ふたのは、全く虚言でありたけれども、飽くことを知らぬ虎狼の秦なれば、璧は取りてしまい、代りの十五城はとてもくれる氣遣ひはなゐ、強て取ろうと云へば、國も諸共にほろぼされてしまわねばならぬと、向ふに欺く心のあるのを見ぬいて、我國大事と思ふ忠義の一言であるから、決してこれは妄語にはならぬのでございます、

三一

勝安房の至誠

勝安房伯は、德川幕府最後の大黑柱でありまして、德川一家の興廢は勿論、我が日本の安危も其一擧一動にあると云ふてもよろしい程の至極重要な地位に居られました、そこでもし當時勝伯が大義名分の如何も考へず、一國の安危盛衰をも無視し、只一時の私心に驅られ、三百年來政權を私したる所の德川家を戴いて飽くまで戰爭をやられたならば如何でせう、江戸百萬の生靈は炮煙彈雨の底に葬るは無論のこと、其勝利は何れにもせよ、外國の干涉は踵をめぐらさずして至り、二千五百年來金甌無缺の帝國も、或は忌はしきことを惹き起したかもしれませぬ所が勝伯は一時世間の毀譽褒貶に恐れて、大義名分を無視する樣な薄弱な人ではありませぬから、德川家が三百年來政權を私したことの恐れ多いことを悔ひ、殊に當時我國の狀態は、勝伯が越前藩を介して京都の新政府の參與に呈したる書に「遠くは印度の破れ、近くは支那の長毛官兵是非曲直を鳴らして同屬相はめば、西洋諸國は必ず其虛に乘ず、今や皇國殆んど同轍に陷らんとす」とありまして、この歸順の正道を以て、小は德川家の安全を圖り、大は國家を危機一髮の際に救ひ出して、帝國進運の基と致されましたのですが、これ忠君愛國の至誠より出たるもので、日本魂の發現であります、

三二　熊谷直實の眞摯なる求法

建久四年、武藏住人、熊谷次郎直實は、吉水へ入室を致しまし た、これより先き、次郎直實は、都に登るとて、相州箱根走湯山に止宿して、住侶專光坊より淨土の法門をきゝ、その夜、また京都より下向して同宿せし妙眞と云ふ尼より念佛往生の敎へをきゝました、熊谷、「左樣の事を承るには、京都にて何方へ尋ね申すべきや」と問へば、尼の答ふる樣、「自らは吉水の法然聖人より聽聞しました、又、安居院の聖覺法印など云ふ名僧達もあります」と敎へました、熊谷は京都へつくや否、便宜でもありましたものか、先づ第一に聖覺法印を尋ねまいりて、「坂東より登りし入道であります、法門を習ひに參上せり」と申し入れました、かくて何れもいましたやら、直實、懷中より短刀を出して、頻りに式臺の石に合はせて磨いてゐました、寺中の僧侶、大に恐れ騷ぎて眼を放さず、中にも能く知れる者ありて、「あれこそ武藏の國の住人熊谷次郎直實とて、源平の間に隱れなき剛勇の人である、法印不意に對面ましまして不覺の恥辱を取り玉ふてはならぬ」と忠告する者もありた、稍ありて法印對面せられましたら、直實、拜謝して申す樣、「我れ武門に生れ幼少より干戈を取り、甲冑を身に纏ひ、源平の戰に多くの人を殺害し、軍陣を破り首を取る事其數を知らず、思ふに並々の

事では到底成佛すべき身ではありませぬ、法印、願くは我が腹をも裂き腸をも斷ち手足をも切りてなりとも、我が助かるべき道あらば示させ玉へ」と願ひました、法印涙を流して、「實にかゝる武士の菩提心こそ難有けれ」と、懇ロに生死無常の有樣を語り、猶安心治定の一段に於ては、法然聖人に尋ねまいるべき由敎へ給ひしかば、熊谷は直に吉水の禪室に趣きました、是に於て、法然聖人、左右なく出遇ひ玉ふた「さては和殿が聞き及びたる熊谷殿にて候かや、ケ樣にまめやかなる菩提心を發し給ふ事、恐くは凡慮の所爲にあらず、皆これ如來矜哀の然らしむる處である、必ずく疎かに思ひ玉ふな、偏へに大悲の方

便を喜び、罪障の輕重をきらはず、唯南無阿彌陀佛々々々々々々と唱ふる外に別の仔細候はず」と、聖人手近く敎へ玉へば、熊谷大聲あげ、足ずりして泣き叫びました、聖人、「何故に斯く泣くぞ」と問ひ玉へば、熊谷、「頭をも碎き足手をもきり命をもすてゝこそ後生助からんと思ひしに、唯念佛だに申せば往生するぞと、安々御示を蒙りしゆへ、餘りの嬉さに用意に携へ持ちたる懷中の劒も何かはせんぞと嬉し涙にくれました」と申しければ、聖人懇ロに無智の罪人念佛して極樂に往生する旨を語り、念佛の安心、こまかに授けられました、法然聖人の高弟法力坊蓮生とは、卽ち此人のことである、

三三　季札の不妄語

支那戰國の時代に延陵の季札と云ふ人が御座いましたが、この人が上國に使にゆくと云ふ其時に、徐と云ふ國によりて、其君公に拜謁を致したことがある、然るに其時季札が帶て居た處の劒は非常な名劒でありたとみゐて、徐の君公が其劒に目をつけて、どうも美しい劒である、どうか我にもァ、云ふ名劒が得たいものぢやと、斯う心に思はれた、口には云はぬけれども欲しいと云ふ風が顏に現はれて居りましたから、季札が心に思ふには、徐の君には我が帶びて居る名劒を、非常に欲しがつて御座ると云ふ風であるが、我れ今上國に使ひする途中であれば、

進上したくとも進上することが出來ぬが、あれ程に欲しがらるゝなら、使ひがすんだならば進上しようと決心いたしました、

さて季札は使も首尾よく濟みましたから、歸りに態々徐の國へ立寄りてみました處が、先きに面謁を致した徐の君公は、已に死んで仕舞ふてゐられたから、それはどうも殘念なことを致した、折角此劒を進上せうと思ひ、態々立寄つたのであるがその世子に向ふて先君の事を話して、此劒は進上致すと申したれは、世子の方では、イヤ予に於ては一向左樣なものは所望でなひから戴くには及ばぬと云ふて受取らなんだ、そこで季札は一旦自分に於て進上しようと云ふ決心した上からは、此儘劒を

持つてかへる譯にもゆかぬ、それでは自分の良心に背くからと云ふて、遂に徐の先君の墓に行いて、劔を墓畔の松の枝にかけてゝいて歸りたと云ふことですが、これは中々名高い話である これ等はまだ辭にはあらはさぬかとても、モハヤ一且自分に決心致したことを履行せねば、良心に對して嘘をつくになるからと云ふので、とう〳〵佩刀を死んだ人の墓にかけて歸りたのでございます、この季札の如きは、眞實に不妄語戒を持つた人と云はねばなりませぬ、

三四　大石良雄の遠謀

『思ふこと默つて居るやひき蛙』、これ芭蕉庵桃青が許して以て勇士と呼びたる、門人菅原曲翠の句である、此句移して以て大石良雄其人を評すべきなり、心血内に燃えて青焔外に迸らんとす、然れども包んで以て之を發せず、但見る容貌愚なるが如く、悠然として我志爲さんと欲する處を爲す、蓋し良雄は稀有の英雄でありたのである、良雄が其身を懦弱に持ちて、仇家吉良家を油斷せしむるの活劇を演ずるに至りしは、實に左の原因あり、

元祿十五年五月中旬、赤穗城を引渡し、新濱村三右衞門方に引取り、今や山科の喬居へ旅立ちせんとする日、大石家に長く勤め居りし勝助なる六十有餘の老翁告別の爲めに來り、種々

話したる末、「此上は心靜かに御本望を遂げて下さりませ」と云ふた、良雄は聞き咎めて「コレ勝助、心靜かに本望をとげよとはソリヤ何事であるか」と問ひ返した、勝助、「何事であるかと御咎めなさる且那樣が何事で御座ります、片貝村の片田舍、在所の者さへ三人よれば、ア、淺野家が斷絶した、殿樣が御切腹御家中はチリ〳〵バラ〳〵、されども御家老の大石樣が御座るから、敵はうたるゝに違ひなゐと、よるとさわると大評判ハドウゾ立派に殿樣の敵を打つて、日本中へ忠義の名前をひろげて下され、そればかりが御願でございます」と、星をさゝれた一言に、さすがの大石も愚痴盲目の百姓にさへ、敵打ちする內藏之助と目につく樣なことでみれば、中々尋常で吉良上杉の間者を欺くこと思ひもよらぬ、コリヤ一思案せずはなるまいと決心して、勝助の手を取りてれし頂き、「勝助、負ふた子に敎へられて淺瀨を渡るとは此事ぢや、今迄は內藏之助の志、知る人はあるまいと思ひしに、片田舍の者にまで敵打する大石と云はるゝ樣では中々本望を達することと思ひもよらぬ、これから內藏之助は放蕩に身をもち崩しなば、人は惡しざまに申すに違ひなゐ其時其方も御恩知らずの犬步士と共々申してくるゝ樣必ず左樣こゝろゐて、大石をほめてくれるな」と云はれた時に、勝助れやじ涙にくれて居たりしが、よう〳〵頭を上げて、「人に褒め

てもらいたいと心がける世の中に、且那様はほめられて居る内は本望とげることもならねば、犬武士と云はれたいとは實に恐れ入りました、其御心なら近々に本望とげるに違ひない、この親爺めもこれから惡く申しまするゆへ、御立腹なされて下さるな「斯くの如く深謀遠慮、啻に仇家を欺きしのみならず我一味の者をも欺き、果ては天下萬人を欺きたり、請ふ其欺き方の如何に巧妙なりしかを見よ、

或時主税は、父内藏之助に向ひ「父上度々私が申す通り、貴所の御心は惡魔鬼神でも魅入りましたか、御なさけなる御心でござります、武士ともあろうものが、三味線などを手になされ、井筒樓浮橋太夫、一力樓茨木太夫を身受けなされ、両手に花を眺めんなど、とんでもなきことをなされます、同志の人々は父上を犬畜生と呼んでれります、勿體ないが私の目からは犬武士とみゐます、されど父上の御心に順はずは孝道たゝず、もし父上に順へば忠義の道たゝず、一層死んだがましでござりせまう、父上御免あそばせ、一足先へ冥土へまいります」と諸肌ぬぎますれば、内藏之助はニッコと笑ひ「コレ主税、其方の目にもこの内藏之助は犬武士とみゐるか、主税、「いかにも犬武士に相違ござりませぬ」、内藏之助、「ウム主税よろこべ、其方の目からも犬侍とみゐしは結構、吉良殿の御首級は良雄の手に

のせたも同様ぢやぞ」、

以上の事實を湊合すれば、如何に其用意の周到なりしかを知ることが出來るでありませう、

三五　板倉勝重妻の助言を斥ける

徳川家康が天下を一統した時に、本多正信の推薦によりて板倉伊賀守勝重を五百石の身分より起して、京都所司代を勤むべき旨仰せ出され、二萬石を賜はると云ふことになりた、そこで本多正信から其内命を傳へて御請が出來るかどうであるかと勝重に尋ねられた所が、勝重の云ふには、「一先づ家に歸りて我妻に相談して、然る後にしかと御返答を申上ませう」と云ふて、家に歸りて妻に相談して云ふには、「今度五百石から二萬石に取立られて京都所司代を勤むる樣に内命かありた、しかし其方に相談せぬ内は此大職は御請が出來ぬ、我れ一度所司代になりた上は公事にあれ私事にあれ、其方が言葉をそへぬと決心がつくなら今度の大任を御請け致そう、さなくば此大任を辭するより外はなゐ、一の事を裁判するにも、裁判をせられたる人が金錢や物品を内處から其方に差出して、其方から兎や角と言を添ゆる日には心は亂れる、裁判は亂れる、一の事柄も何れに定むべきか分別がつかぬ樣になる、其方は如何に心得るぞ」と尋ねられた時、其妻が申すには、「かほど大事の職につき玉ふにいかで

言を添ゆべき、心れきなく所司代の職を受けて下され」との事でありた、そこで勝重は非常に喜んで「然らば殿中に出勤して早速御請を致そう」と、上下をつけて出られました、其時勝重は態と袴の後ろをねじて着けて出かけやうとすると、妻が走り出で、「ねじ袴になりてゐるから見苦しい、早速御直しなされ」と云はれた處が、勝重嚴然として言はれるには、「先刻よりの約束はこの事なり、予が一たび禮服を着した以上は、袴がねじて居やうが衣が裂けて居やうが、一言もそゆることは相ならぬ、其言を添ゆる程ならば所司代をうけることは相成らぬ」と云はれた處が、妻も非常に慚ぢ入りて「此上は如何なる事がありても、堅く約束を守りましやう」と誓はれたので、勝重も喜んで御請をいたし、勝重在職中は最もよく京都が治りたと云ふことである、勝重衰老に及んで所司代の役を辭した時にも、將軍家から其方の後任となるべき、然るべき人物を推選せよとの内命がありた時、「子を知るは親に如かず、拙者の息男周防守重宗こそ適任ならめ」と申上たれば、將軍家も深く感じて直に重宗を採用した處が、重宗在職中二十餘年の間、最も靜謐に治つたとの事である、勝重が幾度も妻を諭して職務上に言葉をそゆるなと云はれたは、道が二筋にならぬ爲めの豫防である、二筋になれば亂れる、亂るれば苦しい、苦しみを離れて心安き生活をする

爲めには、道は唯一筋でなければならぬのであります、

三六　大膽と小心を兼ねたるロスチャイルド

世界第一の富豪たる英のロスチャイルドは、大膽と小心とを兼ね、商人の模範とすべき偉人である、心小ならざれば兎角物事粗略に流れて錯誤起り易く、膽大ならざれば常に大利益を得べき機會に遇ふも思ひ切りて之を斷行する能はず、世に大膽なる人は小心ならず、小心なる人は大膽ならずして、此二者を兼ね得る人は實に稀なることであるが、ロスチャイルドに至りて初めて之を實現せりと云はねばなりませぬ、時はこれ千八百十五年六月十五日、佛のワートルローの大戰爭の時である、其戰

爭は佛國皇帝ナポレオン第一世が、英普露墺等の聯合軍と雌雄を決するの激戰にして、其勝敗により、歐洲各國が佛國が部下に屬するや否やの運命の分るゝ處であるから、隨つて其勝敗が各國の商業に及ぼす影響も亦大なるものである、ロスチャイルドは、早く其戰爭の商業上に大關係あるを察し、其身は英國なれど、急に海を越えて佛國に趣き、私かに戰場の傍らの小さき丘に上り、一心不亂に両軍の分るゝ處を觀察してゐりましたが、各國聯合軍の主將たる英の大將ウエリントンの軍勢が、はげしく佛軍を攻めたて、之に加へて精鋭なる普魯西軍の横合より戰ひ迫りましたから、流石に勇武絶倫なるナポレオンの精兵

も支へかねて敗れかゝるを見るや、ロスチャイルドは直に起ち豫め備へたる駿馬に乘り鞭を加へて疾風の如く、英國に歸りました、當初ロスチャイルドは、沿道所々に駿足の名馬を雇ふて備へおきたれば、今歸るに及んで、漸次に其馬に乘りかへ繼ぎかへ、晝夜兼行して道を急ぎましたゆへ、二晝夜にして英の海峽の海岸に達した、時にたま〳〵風暴れ浪激しくして船頭は恐れて船を發しませぬ、これが爲めに大に困まり金五百圓を出して僅に一人の漁夫を雇ひ、一葉の小舟に棹して、山の如き怒濤狂瀾の間を突進しまして、幸に難なく英の海岸に着しましたから、前の如く途次に備へおいた駿馬にのりかへて、遂に同

月十九日の夜中に倫敦の自宅へ着しました、其頃はまだ電信も瀛車瀛船もない時分ですから、ロスチャイルドの到着は世に稀なる迅速なるものでありますが、かくて、ロスチャイルドは翌朝倫敦の株式取引所に至るに、群り居たる商人は皆佛國に於ける大戰爭の勝敗をしらず、口々に戰爭の有樣を問ふ、然れども明かに之に答へずして曰く、「我國の軍艦よく戰へども、敵は名に負ふ世界無雙の英雄佛のナポレオンにて、而も普より來る我が援兵は未だ來らず、故に同盟軍の勝利甚だ覺束なし」と、これを聞たる商人は皆恐れて俄かに所有の株券を賣出したれば、株式市場は非常なる下落を生じ底止する處を知らず、ロスチャイ

ルドは其機を見すごし、陰に手を回はし下落せる株券を悉く買ひ集めたる後、漸く佛國に於ける戰爭は、同盟軍大勝利の報知が續々到着して、全國の人民は始めて愁眉を開き、俄かに株券を買はんと欲したる爲め、忽ちに其價騰貴し數日にして下落せる日の數倍となりました、そこでロスチャイルドは、時分はよしと再び株券を賣り出したれば、一擧して五百萬圓餘の大利益を得たりと、これ現今同家が世界第一の富をなすに至れる根源である、惟ふにロスチャイルドの單身佛國の戰況視察に趣き勝敗の決するを見るや直に激浪を破りて英國に歸り、力の續く限り株券を買占めたる如きは、其贍の極めて大なるものである

又佛の戰爭が英の商況に大影響を及ぼすべきを察し自ら戰地へ出張し、歸途に乘るべき馬まで、沿道の各地に備へれく如きは、心を配ることの極めて微細なる處である、大贍小心を兼ねる有して初めて社會に雄飛すべき實例は、ロスチャイルドに於て明かに證明してれるではありまんか、

三七　石田小右衞門翁の教誨秘傳

石田小右衞門翁は文政天保の頃に關西に名を知られたる名士である、翁は大阪天滿の商人にて通稱を大根屋と云ひ、相當なる資産家でありました、

或時、京都の寓所に居られしに眞宗の僧侶にして說教に名高

き某氏の來訪せるあり、談、人を諭すの難易に及ぶ、翁曰く、茲に母子の間甚だ不和なる者ありと假定します、子として其母を敬愛せざるばかりでなく、動もすれば罵詈侮辱して毆打せんとするに至る、隣保親屬其子の不孝を憎み、其母の不慈なるにもせよ、人の子たるものは之に事ふるに孝行をせねばならぬと說諭すれども、馬耳東風で毫も用ゐませぬ、貴僧は此不孝兒を諭すには如何なる言を以てせられますか、僧こたへて曰く之を諭すには、初め身體髮膚を父母より受け、懷抱哺乳養育の恩を受けたることなど諄々と說き聞かしむるの外ありませぬ、翁曰く、是等の言は彼の不孝兒聞て以て常套となし、敢て耳を傾けしむるに足りませぬ、予は先づ之を諭さんとするに、最初渠儂に同情を表して、縱使親なりとも、子に對するに不慈を以てするは人道にあらず、然るに汝が隣保も親屬も唯汝が不孝のみを責むるは偏頗なりと云ふ、其時渠儂は復も不孝を戒しむる說諭ならんと思ひしに、如何にも己が味方を得たりと驚喜に堪へず、其母が平常の言行に就て、己れをして孝ならしむる能はざる理由を眞僞混合して陳述するであろう、茲に於て我は、如何にもそう云ふことでありたが、汝が云ふ處理なきに非ずと一々懇ロに聞き取り、既に渠儂が心中に包藏せる毒氣を十分に吐露し終るを待ち、却說汝は母の事に就てモハヤ我に語る程の

事なきや　若し尚あらば委しく聞かしめよと云ふ、概要斯の如きのみと云ふに及びて後、予は其不孝兒を擒にする作戰計畫に着手すべし、其語りたる言によりて、母子の不和なる所以を知れり、汝も亦母に依頼して其身體を製造してもらいしに非るべしなど、豫め渠儂が逃げ路を杜ぎ、汝禽獸と伍することを好むにもあらず、必ず人類として人倫を守ることを否むほどの白痴に非るを知る、人倫の上より云へば親子の關係は、對等に理非を論ずることを得ず、汝も亦妻あらば宜しく子あるべし、若し汝が子をして汝の母に對する如く、汝に向ふて抗爭せしめば汝はこれを如何思ふやと、これより奇兵を一時に四面より夾擊し、不孝兒をして前に自白せしめたる言を證據として、佛經儒典等に依て攻具をつらね、寸歩も渠儂をして我が重圍を脱することを得ざらしめ　遂に涕泣嗚咽せしむべし、これ全く奇兵を以て捷を奏するの方法なり、若し貴僧の如く追手より整々の陣堂々の旗を以て攻めんには、曠日彌久、容易に渠儂をして悔悟せしむるの効を奏し難からんと、彼の僧大に感歎して去る、

編者曰く、予此石田小右衛門翁の談を聞て、中心大に感服し、之を實地に應用せしこと既に十數回、皆多少の効を奏するに似たり、布敎傳道に從來する者は、大に參考に供すべき事なり、

三八　土井利勝と大野仁兵衛

土井利勝（大炊頭）は德川幕府の御老中で、よく眞心を盡く

して將軍を助けられました、此人は政を執るに公平で、正直で、そして愼しみ深く、誠に三河武士の手本とも云ふべきであります、

或時、利勝は自分の居間に一尺ばかりの唐糸の切れの落ちてあつたのを見て之を拾ひあげ、大野仁兵衞と云ふ家臣にあづけて、「其方この糸を大切に致し置けよ」と仰せられました、之を見たる家臣の面々は、あの樣なる糸屑を大切にせよとは大名にも似合はぬことなりとてひそ〳〵笑まひした、それより三年ばかり經て、或日利勝は仁兵衞を御招きになり、「先年其方に預けわきたる糸屑は如何致したか」と御尋になりました、仁兵衞は腰の巾着から取り出して、「此で御座ります」と云つて差上げました、利勝受取りて脇指の下緒の先のきれた所を自分でくゝりつけられ、家老寺田與左衞門を呼び出して、「これ見よ、三年以前に拾ひたる糸屑、仁兵衞が大切に致しわきくれたればこそ今下緒の先をくゝりて物の役に立つた、仁兵衞は感心な男なれば、三百石を遣はしやるべし、曾て若侍などが、大名にも似合はぬ事なりとて、笑ふたものもあるさうぢやが、これは以ての外のことである、元來唐土の民が蠶を養ひ繭を取り、それから糸にしてはる〴〵日本まで海路を越る來るのは容易な骨折ではなる、それを思はずにたとひ一尺ばかりの糸屑なりとも之を

粗末にしてはならぬことである、其方よく〳〵若侍どもに申し聞せよ』と仰せられました、

利勝は天下の政治を執る御老中の御身分ですら、斯樣に僅の品物を大切に取扱はれました、すべて品物を粗末にする人は、驕に流れて貧困に陷るものであります、

三九　コロンブスの玉子の直立

彼の有名なるコロンブスが、千四百九十二年に初めて新世界を發見して、それから初めて歐洲へ歸りて來たら、彼處でも歡迎、此處でも招待と云ふ有樣で、初めコロンブスが航海に出掛る時までは、其說に反對して居つた連中までが、非常に喝采して同氏を迎へた、併し腹の中では竊かに同氏の成功をねたみ、同氏の成功は無謀なる冒險がまぐれ當りに當つたのである、やりさへすれば誰でも當るのでありたと思つて冷笑して居る者も少くはなかりた、コロンブスの方でも之を知りて居るから、或日盛大なる宴會の席上で、凡て物事は人の發明したあとや、成功した後から考へてみれば、實はそんな下らぬ事かと思ふ樣な事柄でも、誰も之を爲さぬ前に第一に之を爲すは隨分六ケ敷ことでありて、非常の決心と勇氣と忍耐とを要する次第を懇ろに話をして、さて食卓の上に馳走にして載せてありた玉子を一個取りあげて、衆に示して云ふには、今一寸思ひ付きましたが、

誰も手をつけぬ新事業を企つるは、丁度此玉子を食卓の上に直立せしめようとする樣なものである、この席上の方で、誰方でもこの玉子を食卓上に直立せしむることが出來ますならば、御手際を拜見したいと云ふた、處が一人もそんな手品師の樣なことを爲し得るものがなかりた、そこでコロンブスは、ニコ〳〵と笑ひながら、「これは皆樣の御氣のつかぬことゝ見へますが、實は何でもなゐことであると云ふや否や、玉子の尻で輕く食卓を打つよと見る間に、殼が一部こはれて、玉子は立派に直立した、一同がそんなことなら誰でも……と云ふ顏をしたら、コロンブスはすかさず、こんな何でもなゐことでも、人の爲さぬ前に皆樣の中、一人も氣がつかなんだのではありませんか私が今度の新世界發見も、やつた後から考へてみれば、實に誰でも出來ることの樣でありまするが、全く人のやらぬ先でありた爲めに、隨分困難を致しましたと云ふた時、成程と感心せぬものは一人もなかりたと云ふ事である、實際世の中に未だ誰も着手せぬ新事業を起し、之を成功するには、非常の勤勉と忍耐とを要するのであります、

四〇　森蘭丸の誠實

織田信長の御側の侍に森蘭丸と云ふ人がありました、此人はまだ小供の時から、信長に仕へて御刀持を勤めて居ました、

或時、主君信長が御廁に立たれましたが、蘭丸は其所の縁側に御待申して居て、何の氣もなしに御刀の鞘に菊模様のあるのを數へて居ますと、信長は廁の窓からソットのぞいてたかれて知らぬ顔して出て來られました、

其後幾日も立つてから、信長は御側の侍たちを集められまして、其刀を示して云はれますには、此刀の鞘の菊模様の數を云ひあてたものには、此刀をやろう、皆々あて〻見なさい」と云はれたから、誰も〳〵一心になりて申されます、けれども、蘭丸一人は初めから默つて一言の答も致しませんでした、

それで信長は蘭丸に向はれて、「蘭丸御前はなぜあて〻見なぬか」と云はれますと、蘭丸が申しますのに「私は先達て數へて見ましたので、幾つあると云ふことを知りて居ます、それに外の知らなる人と一緒になりて、知らないふりして云ひ當てましては、貴公樣を欺くことになります、私はそんなことは大嫌であります」と申上ました、それで信長も大層喜ばれまして「貴樣は誠に正直なものだ」とほめられて、其刀は蘭丸に下されました、人は何でも正直に限ります、

四一　露西亞の貴族と忠勇なる御者

露西亞の北方の森では一年の中、八ヶ月も雪が積りてあつて狼が群をなして歩きまわるのです、殊に夜は飢ゑたる狼が

食を求めに出るので、旅人に取りては最も危險であります、

或時、露西亞の貴族が妻と娘とを携へ、橇に乘りて廣々とした平原を旅行しました、貴族が或旅館に到着したる時、まだ日暮には少々時間があるので、一寸休息した後で、直に橇の用意をさせやうとした、旅館の主人は之をれし止めて、行手の森には日暮から狼が出ますから甚だ危險です、ドウか今日は私宅に御泊り下さいと云ふた、然し貴族はきゝませぬ、旅館の主人は商賣上で自已の利益の爲め止めるのだと思ひましたから、トウ〳〵橇に乘りて出かけました、橇は四頭の馬に引かせたもので、御者は貴族の領地に生れた百姓で、主人を愛すること甚だ厚いものでありました、橇は堅き雪の上を走りて矢の如くに走ります、そして月は遙かの森かげに現はれ、磨いた銀の如き光を放つて雪の路を照しました、ア、好い景色、危難が目の前にあろうとは思はれません、

不意に少女が云ひ出した、「アノ微かな不思議な音は何でせう」、父、「何でもなゐ、風が林に鳴る音だろう」、少女は目をねぶつて暫く靜にして居ましたが、忽にして顏の色も青くなりました、「ね父サンあれはどうしても風の音ではありません、聞いませんか、アレあれ聲が！」、父も遙かに後ロの聲を聞きました、妻も少女も此聲が何者で

あるかと少しも知らぬのですが、父はよく之を知りてゐるのです、貴族は御者に私語いた、「狼が我等の跡を追ふて來た、汝の鐵砲とピストルとを用意しなさい、まだ遠いから多分遁れることが出來よう、馬を急がせよ」、御者も一生懸命に馬を急がせたが、彼の薄氣味わるい吼聲は次第〳〵に近付いて來ました、そして其聲が明瞭と聞ゑる樣になりました、飢えた狼の一群が追ひかけて來るのに違ひありません、貴族は御者に向つて云ふた、「狼がいよ〳〵逼つて來た時には汝眞先に立つ一匹を打て、私は二番目の狼を打たう、二匹を倒せば他の狼は之を食うに違ひなゐ、其中に又少しは逃げらるゝであろう」斯う

云ふて居る中に狼は長い列をなして近いて來た、貴族と御者とは發砲した、先に立つた三匹の狼は倒れた、果して他の狼は此三匹を食ひましたが、間もなく又逼つて來ます、再び二匹を倒したが、然し次の宿場にはなか〳〵道が遠いです、貴族は止むを得なゐので、馬の一匹を解き放して逃げた、憐れなる馬の悲鳴する聲が背後に聞ゑます、狼の爲めに食ひ裂かれて居るのでせう、狼は一頭の馬を喰ふてしまつて又忽ちに逼つて來ました、餘儀なくもう一匹の馬を放つた、これも固より食はれて仕舞ました、御者は終に主人に向ふて云ひました、「私は小兒の時から御奉公申し上げて、貴方の御爲めには固より一命

お惜しみませぬ、今我等は到底安全に次の宿場まで逃げのびることは出來ますまい、私は橇を下りて狼を拒ぎとめますから、其中に急いで逃げて下さい」、貴族「否々それはならぬ、死ぬるも生きるも一緒にしよう、汝を一人見殺しにはならぬ」、御者、「願くは私の妻と子とを行末御目かけて給はれ、私は決心しました、殘つた二頭の馬が力の限りに急いでゐる、橇の上で主人と家來とが押問答をして居りましたが、狼の群れ容赦なく又逼つて來ました、御者は玉のあらん限りピストルを發射し、續いて橇を飛び下り、只一人で狼の群と奪闘しました、忠勇なる御者は暫く狼を支へて食ひ殺されてしまいましたが其御蔭で貴族はやう〳〵次の宿場まで遁れることが出來ました

貴族は此忠勇なる御者の爲めに一の墓標を立てゝ、左の如き文字を記しました、曰く、

友の爲めに一命を捨つるは愛情の最も尊きものなり

四二　未來の有無と木戸孝允公

木戸孝允公の養子に正次郎と云ふ人がありた、この人と宮城時助と云ふ人とが、或日の事、未來のあるなしに付て大議論をした、木戸の養子の云ふには「未來と云ふものはあるべきでなゐ、死は人間の終り、それより後はあるものでなゐ」と云ふと宮城時助は「イヤそうでなゐ、未來はあるものぢや」「イヤなゐ

ものぢや」「イヤあるものぢや」と爭ふて居る所へ木戸公がまいられて、「れ前方は何を諍つてれる」と問はれましたから、「未來の有無に付て議論をしてれりまする」と申しますと、「なるほどそれは面白い議論ぢや、正次郎は何と云ふ」「ハイ私は未來はなゐと申します」「宮城君は」「ハイ私は未來はあると申します」これをきかれて木戸公は、「正次郎御前はキット未來がなゐと斷言することが出來るか」と問はれたら「ハイキットとは申されませぬが、マアなゐだろうと思ひます」と答へまするとまた、更に宮城氏の方に向つて、「君はキット未來があると云ふことが出來るか」と問はれたら宮城氏も「キットとは申されませぬが、マアあるだろうと思ひます」木戸公は「さて両方ともだろう議論ぢやな、あるだろうになゐだろう、何方もだろう議論なら、丁度喩へてみると、外へ出るのに天氣模樣がわるい、雨がふるだろうか、晴れるだろうかと云ふのと同じことぢや、其時汝方はどちらの用意をしてゆく」と問はれますから、両人とも「ソレハ雨の用意をしてゆきます、晴れるだろうと思ふて雨に遇ふより、雨の用意をして晴れる方がよろしい」と答へました、木戸公、「さうであろう、然らば未來はあるだろうと思ふて用意をして行つたらどうであろう、なゐだろうと思ふて用意をしてゆかずして、もしありた時には困るからナアー」、とて大笑をせら

れたと云ふことがあります、

四三　二宮尊德翁の信佛因緣

尊德十四歲の時、隣村飲泉村觀世音に參拜し、堂下に座して念ずることあり、忽ち行脚の僧來り、堂前に座して讀經す、其聲微妙なりければ、尊德一聞瞭然として意中歡喜に堪へず、誦經既に終る、謹みて問て曰く、今誦する所の經は何經ぞ、僧應へて曰く、世の誦する所は吳音なり、今國音を以て轉讀せり、これ子の解する所以かと、尊德懷中を探ぐり錢二百を奉じて曰く、願くば寸志を呈せん、今一たび誦せられんことを請ふと、僧その志に感じ、轉讀以前の如し、尊德、胸中豁然として大に喜び、柏山村善榮寺に至り和尚に謁して曰く、大なるかな觀音經の功德やと、證明了々、和尚大に驚きて曰く、予すでに耳順を超えたり、多年此經を誦すること幾百遍と云ふことを知らず、而も未だ深理を解することを能はず、然るに子若年、一たび讀誦をきゝて無量の深理を解く、嗚呼これ菩薩の再來か、今野僧此寺を退くべし、子願くは僧となり、衆生の爲めに此寺に住し、大に濟度の道を行はれよ、尊德固辭して曰く、これ予の望む所にあらず、予祖先の家を起し其靈を安んぜんとす、志す所は出家にあらずと、然れども尊德は佛法を以て萬民を濟ふより大なるものなきを了知せりと云ふ、

四四　神光法師と達磨大師

魏の國に神光と云ふ出家がありて、豫て佛道修行に心をよせ日夜怠らず學問をせられたが、何卒明師に遇ふて敎が受けたいと思召す折柄、天竺より達磨大師が渡られた、そこで彼の神光法師は渡りに船を得たる如く、闇夜に燈火を得たる心地して大に喜び、遙々と尋ねゆきて、達磨大師の御草庵へ推參いたされたゝ、既に其日も夜に入りて、九時過ごろ、柴の戸をほと〳〵と御叩きなされたれども、達磨大師は座禪の床に觀念の心を澄し默然として御返事をなされぬ故に、其夜は草庵の軒下に座をしめて、通宵佛道修行の御工夫をなされた、折しも寒い頃にて夜半より雪降り積りて、白妙の東西わかたぬ夜の景色、寒風は凛々と肌に徹り、ふり積る雪は膝をうづむ、一點の燈火だにもあらばこそ、さぞ寒むかりたであろう、既に夜もしら〳〵と曙の頃、彼の達磨大師が草庵の中より、咳はらいともろともに、柴の戸をれしひらき、其樣子をつく〳〵と御覽なされて仰せらるゝには「其方は何の用事ありて、此大雪の中に行んで居らるゝぞ」と御尋なさるゝと、彼の神光法師は爰ぞ得たりと顏をあげ「サテは別儀でも御座らぬが、貴僧には天竺よりはる〳〵と此支那國へ渡らせられたと承る、何卒至極の法門あらば承はらんと、昨夜御草庵まで推參致しました、モハヤ夜も深更に

及びしことゆへ此軒下に夜を明しました、憐れ不憫と思召し、釋尊より御相傳の法門を御傳授下され」と涙と共に御願ひなされた、其時達磨大師の御返答に「諸佛無上の妙道は曠劫に勤修して、行じ難きを能く行じ忍び難きを能く忍べども、未だ尚其道に至ること能はず、汝其輕卒なる志にて我法を受けんとすること必ず不可なり、汝若し實に我法を求めんとする僞りなき證據あらば出すべし、其上ならでは我法を傳授すること能はず」と仰せられた、其時神光は兼て用意を致されしにや、懷ロより短刀を取り出し、右の手を臂元よりスッパリと切り落し、左の手にて其切り落せし手を取りて、達磨大師の前に置て、「これを

僞りのなき證據として法門を御聞かせ下され」と御願ひなされた、其時達磨大師も御感心あらせられて、即座に釋尊より傳はりし、以心傳心の直指人心見性成佛の法を御相傳なされて、遂に禪師の第二祖と御なりなされたと、緇門崇行錄と云ふ書物の中に記してある、

四五　大久保彦左衞門の頓智

徳川家康公に仕へし大久保彦左衞門と云ふは、兼て頓智の能き人にて、諧謔事を言ふてれられた、或時、或大名の若殿に向ふて、功名談をせられて云はるゝには、「今の若い者は柔弱でならぬ、拙者などは東照神君に御供をして、七十餘度の戰爭に、

或は野に臥し山に寢ね、風に吹かれ雨に晒されたが、夫でさえ只の一度も風邪ひいたこともなく、今は太平の御代となりて、雨戸をしめ障子を鎖し、綾や緞子にまとはれながら、とかく柔弱で役にたゝぬ、貴殿も憚りながら、この大久保の膽玉でも少々煎じて召し上れ」と、戯言やら高言やら聲高々と罵しり半分に申された、そこで若殿も少しむかついて癇癪にさわりた、何分相手は主君家康公の寵臣、御家に取ては大功のある老人故に態と面にもあらはさず、胸を押へてこらへて居られたが、如何にも殘念にありたとみゐて、若殿の申さるゝには、「それは近頃忝けなき貴殿の御親切、膽を煎じて呑めとあれば、貴殿の膽玉を少々頂戴仕らん聊かなりとも御分け下され」との注文をうけ、「それは易い事、拙者の膽玉いかにも進上仕らん、但しこゝは殿中の事ゆへ、諸事憚もあれば、夕刻に我屋敷へ取りに來て下され」と約束をきめて、大久保は我が屋敷へ歸らるゝと頓て若殿の方より使者がまいりて、「膽玉頂戴」とつめかけて來た、流石の彦左衛門も手を拱んで考へて居たが、程なく左右の小姓を召して、燒鹽を入れる程の小さな壺を取り寄せ、中へ簡短な手紙を入れて、外を紙にて目張をして、彼の若殿の使者に之を渡し、大切に持ち歸り若殿へ進上致すべしとの口上ゆへに使者は畏り其壺を持ち歸れば、若殿は今や遲しと待受け玉ひて、

ヨモヤ切腹して活膽を吳るゝ程のこともあるまい、又餘の物を偽りてれこす譯にもゆかず、如何返事の來るならんと、待ち構へて居らるゝ處へ、使者は程なく歸り來りて、彼の小さき壺の紙にてシカと目張りのしてあるのを、恭しく臺にのせて若殿の前に差出せば、若殿はピックリ、よもやと思ふたが、これは今日の返答にこまりて、切腹されたに相違はあるまい、もしや左樣のことのありたなら後日の大事如何あらんと、戰々兢々ガタ〳〵振ひ、顏青ざめて物をも云はず、只茫然と彼壺を見詰めて居られたが、何はともあれ先づ一應、壺を開ひて檢査を遂げ實驗せんと、氣味わるながら壺を手に取り目張りを剝ぎ取り、ソット內をのぞき見れば、中に一通の手紙がある、ヤレ嬉しや先づ暫くと落ちついて、手紙を引き出し讀んでみれば、文字は僅か二十ばかり、平假名交りにて、

あまりの事に膽がつぶれて御座なく候

と認めてありた、ナントよい頓智ではござらぬか、

四六　正算僧都母の慈愛に感泣す

叡山の西の塔院と云ふ處に正算僧都と云ふ若い出家が御座いましたが、此人は至りて貧乏な御方であり、て、寒さ飢さを打ち忍んで學問を致してれられましたが、京都に一人の母親がありたれど、これとても同じく其日〳〵の煙が立ち兼る樣な有樣で

御座いました、頃しも冬の末方、四方の山に白々と雪の降り積るを見るにつけても、子を思ふは親の習ひで、我身の貧乏よりも只子のことが片時も忘れられぬ位なものであるが、さてあの正算僧都は此寒さに、飢さも忍んで學問をして御座るであろうが、世にある親ならばせめては折節毎の付け届でもして、人中で肩身をしぼめさせまいに、何を云ふても此貧乏な母親がそうする手段もなし、近頃は久しく便りもないが、病み煩ひてもせぬかと思へば、心元なくてならぬに依て、寒さの時分なれば身體を大切に學問せられよと、細々と文認めて、夫れに白米壹袋を添へて使の者をたのんで正算僧都の許へ贈られました、案

の如く京都に夫程に雪が積る位だから、叡山は目の限り平ら一面に白妙、漸く暮れ方に叡山へ着しましたが、窓に燈火の光りの幽かに見ゆるをたよりに彼の使の男は、「私は京都より正算僧都の母御の使にまいりました」と云ふ聲をきくなり、正算僧都は出て來て其男にあはれると、使は手紙と白米壹袋とを差出しましたれば、正算僧都はこれは珍らしや、京都の母上より來た文であるかと、再三巻きかへし讀み返して、「ア、勿體なき母上の御慈悲は有難い者である、何はともあれ、其米を出して炊いてあげよう、サ、寒かりたであろうと」、れ飯をたいて使の男にたべさせ、自分も箸とりて心よく食べられたが、どうした者

か彼の使の男は御膳に向ふて御飯もたべずに、只ポロリ〳〵と涙こぼして居る、正算僧都はハテけしからぬ、此御飯はなぜたべられぬかと問はれたら、男が答へて云ふには、「されば御座ります、貴僧はこの白米を唯尋常の米と思召して在らせらるゝそうなが、これは貴僧の母御が此間より色々思案なされたかなれど、どうも仕様もなし、夫れ故自分の髪をはさみ切りて賣代なし、其代金にて買ひとゝのへられたる此白米、女の身はかみ飾りとて一筋を千筋になれとかきなでゝ、金錢よりも大切に思ふ黒髪を、可愛我子の爲めなれば、ヶ様になされたのでありまず、私も母親と云へば同じ事、嘸此様に思ふてくれるであろうに、夫を夫とも思はずに、母に向つていつ和らかに言云ふたこともなく、一日片時の孝行さへ盡したことも御座らねば、夫を思へば悔しくて、今此御膳に向ふにつけ、此白米は親の肉此飯一粒々々が母御の髪筋一筋々々に當ると思ひまするれば、我等が様な賤しいもので御座るけれども、餘り哀れに悲うて涙に胸もふさがり、中々食事も喉へは通りませぬ」と物語り致しまするとと、正算僧都は一伍一什をきかれ、「さて〳〵左様でありたか、親は思へど子は思はぬと、そう云ふ事とは夢にも知らず居たのは淺間しいことでありた」と、暫時の間ひれふして感涙にむせばれたと云ふ、ここが長明の發心集にかいて御座います

が、今釋迦牟尼如來が一天萬乘の君になるべき太子に御生れなされ、何一ッ不自由なき身を以て、樹下石上に十二年の御苦勞あらせられ、出山の後も五十年の間、席のあたゝまる事なしに御說法なされたと云ふものは、ドウカ我々衆生を轉迷開悟させてやりたいと云ふ大慈大悲の御心より出たもので、丁度正算僧都の母親が、女の黑髮切りてなりとも、我子に米を贈りたいと云ふ慈悲心と同じことであります、末世末代の我々までも、悟りの眼を開かせて大安樂を得させたいと云ふ、釋迦牟尼如來の御志の程を難有く思ふて、報恩謝德の念をれこさねばなりませぬ、

四七　安然大德の童子敎

現今は文明の餘光として、如何なる山間僻地に至るまでも、敎育機關の備はらぬ處はなき程の狀況となりましたが、明治維新までは子弟の敎育は寺子屋と稱へて、村夫子の閑事業であり て、甚だ委微たるものでありた、而して其寺子屋の始りは名高き安然和尙である、今其物語を揭ぐること、致しませう。

安然和尙と云ふは學德幷に高き名僧でありたれど、如何なる因緣にや至極の貧窮でありた、或時鞍馬寺へ參り玉ふに、多聞天は其事を知りて、八地以上の菩薩なれども、貧窮に暮さるゝことをあはれに思ひ、和尙の前に影向して申すやう、貴僧に何

か福分があるかと過去七生にさかのぼりて尋ねますれど、何の善因も御座らぬ、たつた一つだけ、貴僧が七生以前に江州の商人でありた時、越前へ商賣に行かれましたが、折柄夏の炎天でございましたから、木の芽峠で休息をして、梨を一つ食ひ、其種をすてられた、其時一疋の蟻が其梨の種の甘味を嘗めましたが、それが今は人界に生をうけて、京都三條通りに立派な商人となりてゐる、それより外に貴僧に因縁のあるものはありませぬと告げられた、

和尚は大に喜んで、早速京都に來り三條通りを托鉢して歩いて居られたら、大きな商家から呼ばれた、何の御用向であるかと尋ねられたら、商家の番頭の申すやう、今日は先御主人の命日でありますから、讀經を願ひたいとの事でありた、和尚は承知して奥の間に通り、主人夫婦にも挨拶して佛前に讀經せられたが、これが終るなり、叮嚀なる非時を饗せられた、其時主人の申さるゝには、私方には兒童が八人もありて、これを育てるに困りてゐりますが、何卒貴僧は私宅に足を留めて、八人の兒童達に手習ひを敎へてやりて下さりますまいか、さすれば私は誠に滿足でございますと申された、安然和尚は多聞天の靈告もあるものゆへ、因縁のある處は不思議なものであると感じ入り、遂に主人の請を容れ、其家の一間を手習の稽古場として、

いろは五十音等から敎へかけられた、そうすると向側の家の子も世話になりたい、両隣からも頼みに來ると云ふ樣な工合でつい二十人ばかりの生徒が出來た、これが寺子屋の起原と云ふものぢや、其時安然和尙は其兒童達の爲めの敎科書として製作せられたが、名高い「童子敎」と云ふ書物で、今の世まで人口に膾炙してれることである、

四八 ロンドン商人の正直

英國のロンドンに一人の商人がありましたが、自分の子供に商業見習の爲めに、亞米利加のワシントンの知己の所に指して使はし、「どうか貴店にれいて商業の見習ひをさしてく」れと云ふて、其子供をやりましたが、向ふは中々大きな商人でありました、されど英國にれいて有名な商人の子ほどありて、敎育も行屆いて居りたとみゐて、數學も出來れば字も好く書くし、それのみならぬ物事の道理を辨へ、至りて正直にもあり、是と云ふ一點の非難すべき處もなわから、預りた主人もこれは中々よく出來たものだと感心して、末賴母しう思ふて目を懸けて居りました、處が或日の事、立派な服を着て四五百圓もしようかと思はれるダイヤモンドの指環をはめ、頭の飾りも夫に相應した處の一貴婦人が來まして、一寸反物をみせてくれよと申しました、スルト丁度ロンドンから來て居る息子がそれを引き受けま

して、あれやこれやと澤山な反物を出しましたが、そうして見て居る内に、一反氣に入りたのがありたと見ましてそれの價値を聞いて、これを買ひませうと云ふのを、彼の息子はよくみて、一寸御待ち下され、茲に少し疵がございますが、それでも御買上になりますかと云はれて、彼の婦人は其疵を見ながら、暫く思案して居りましたが、それでは此品はまづ見合せにすると云ふて歸りました、折角よい客人がとれたと、主人を始め皆々喜んで居りましたのを、彼の息子が疵のあることを云ふたによりて、一厘の商もせずに仕舞ましたから、主人が思ふには此品一ツ賣りても何百圓の金がとれるものを、あの小僧が大切な品に疵があるなどと、いらざることを云ふた爲め、大きな商を仕損ふた、あれでは到底商法人には見込がないと、直に其親の許へ手紙を書いて、今日まで貴殿の息子を商法人にするつもりで、色々教育をしてみましたれど、とても此子は商人になる見込は御座らぬから御引取下されと、ロンドンへ向けて云ふてやりましたから、其父親は大に驚いて、どう云ふことでありたかと、早速ワシトンまで來てまいりまして、事の樣子を尋ねますと、主人の云ふには、實は先日ケ樣〳〵でありて、何百圓と云ふ商をする處を、餘計なことを口ばしりて、其爲め大層な商賣を仕損じた、今からアヽ、云ふ馬鹿正直な根性を持て居る

様では、とても一人前の商人にはなれまいと思ふから、預ることは今日限りて斷りますと、ケ様に申しましたら、ロンドンの親は、それはけしからぬことを申さるゝ、商業と云ふものは、貴殿も御承知の通り、正直が最も肝要だと申すでは御座らぬか然るに馬鹿正直などと云ふ樣な、舊式の思想を持て御座る御方には、大切なる子供の教育はまかされませぬ、左樣なことならば貴殿の方から戻して下さるまでもなく、私の方より引取りますと云ふて、直樣つれてかへりて仕舞ましたが、後に其子は出世をして、有名なる豪商になりたと云ふことが、「モーラル、ラスブック」と云ふ書物の中に書いてある、是等は實に聞くべき話であります、偷むと云ふことは何も手を出してぬすまずとも、現在此品物に疵のあるのに、これは無疵の上等品だと僞りて商をする時には、バヤ已に客の物を盜むのでございます、實際價値のなゐものを、價値があると賣りつけるのは、これも偷むと云ふものでございます、嚴密なる意義から云へば、是等はバヤ己に不偷盜戒を犯したものと云はねばなりませぬ、

四九　脇坂覺衛と平山三太夫

脇坂淡路守の家來に脇坂覺衛と云ふ人がありました、同じ家中の用人で平山三太夫と云ふものが、或時金錢に差詰りて、覺衛のもとを訪ひ金子貳拾両を貸し玉へと願ひました、覺衛は豫

々懇にして居る人ですから、心安く承諾して、早速御貸し申すべければ茶の間へ御通り下されと云つて案内してくれました三太夫は茶の間へ通りてみますと、御家老様の家にも似合はず戸障子も破れ疊もしかないで、奥様も若様もよごれた衣物を着て居られました、覺衛は平氣な顔で、傍の引出から貳拾両の金子を取り出し、「武士は相見互の事ですから、決して返濟しようとは思はなゐで下さい」と云ふて、三太夫に手渡し、又更めて「貴殿は三百石の知行を取りて左やうに不足な譯はなゐ筈ですが、何か思はぬ物入りでもありましたか」と尋ねました、三太夫、「誠に面目なゐことですが常々不足勝で困ります」、覺衛「それは不思議なことですな、我は八百石の知行で八百石だけの役目をつとめますが、何不足なく少しは金錢の餘分があります一體貴殿は如何樣なる暮しをせられますか」三太夫「恥かしい話ですが、朝夕三度飯と汁とを食ひ、外に有合の菜一種づゝ添へます」覺衛は驚いて云ひました、「然れば御難義も御最もです私共は月の中に、朔十五日二十八日の三度より外汁は食べませんゝゝ、そザ戰爭と云ふ塲合には、三度〳〵白い飯に汁をかけて食ぶ譯にはまいりませんから、私ぼ常々玄米を炊いて食ひ慣して居ます」、

三太夫は之をきゝ、深く耻入りて歸宅しましたが、早速妻こ

家來とを呼び出して、家老の暮向の模樣を語りて聞かせ、家老職でさゑ其樣に節儉せられるのに、我等の暮方は分外の驕りであるから、今日より玄米の飯を焚き　汁は年内に五度と極めるによりて、厭だと思ふものは暇を出しますぞと申渡しました、それから三太夫は非常な節儉をしたものですから、借金も返し多少の貯も出來ました　彼の二十両の金を覺衞の處に持參して暮向を改めたことをも話しました、覺衞は喜ばしき顏色にて三太夫を留め、夕飯を振舞ひましたのに、献立は二汁五菜に酒それがすんでから茶も菓子もありて、膳椀までも頗る美しいものでした、三太夫、『大層御馳走樣になりましたが、今日の有樣は去年の御言葉とは違ひます、これは如何の譯ですか』と尋ねました、覺衞『御最の御不審です、此器物は親讓りのもので一度も用ゐたことがありませんが、今之を貴殿に用ゐなければ一生用ゐる時がありませぬ、今迄我が志を人に話したことも度々ありましたが、貴殿の如く之を用ゐてくれた人はありませぬ然るに貴殿は直に之を用ゐてくだされたから一生の歡び之に過ぐる者はなゐによりて、ケ樣な御歡待を致すのぢや』と云はれたそうです、

五〇　少女の至孝惡人を感化す

丹波丹後の國境に毘沙門山と云ふ處あり、其山の麓の村里に

貧しく暮せし百姓ありて両人の娘あり、姉は先妻の子にて十七歳、妹は十歳なりしが、七年以前に父は死去せられ、聊かの田地がありたれども、年々生産の不足より、終に賣拂ふて朝夕の烟りも絶々に月日を送りける、然るに二人の娘は至りて孝行なる者にて、母親を大切にし日夜怠らず孝養を盡せしが、何分にもまだ姉は年若く妹は幼きことなれば、三人の生活も屆き兼ね姉は野に行き山に出て草を苅り薪を採り、或は人に雇はれ僅かの賃を以て米醤油などを買ひ、妹は菓物などを商ひて毎日に市町に出で母を養育せしが、母親は元來病身なりし上に、眼病を疾みて、遂に両眼共につぶれ盲目となりた、食物さへも乏し

き中に両人の娘はいろ〳〵と心を痛め、藥を求め療治を致しける、或時娘両人にて人なき處にてひそかに物語りけるは、我等両人にて夜を日についで稼ぎ働けど衣食さへも心に任せず、況んや母上の眼病の療治は大金がなければ醫藥の手段もなし、何卒一度は母上も全快させ、樂しき月日を送り度しと思へども心に任せぬ浮世の有様と共に涙にくれ居たる、暫くありて姉の云ひける様は、都には勤め奉公の口ち入れするものありと豫て承れば、妾は京都へ行て身を賣り、其れ金で母様を養ひ、且つ眼病の療治をも致さんと思ふ間、妹にはまだ年幼きことながら母を大切に養ひ萬事に心をつくすべしと云ひきかせければ、

妹は姉に別れんとをイー悲しく思ひ、共に涙にむせびつゝ返答
をせざりしが、此事は母上にゆめ〳〵語り玉ふなと、打連れて
我家へかへりける、かくて其日より日暮れぬれば妹の見ゆざれ
ば、姉は驚き行方をひそかに母に尋ねけるに、母親の申さるゝ
には峠の毘沙門堂へ心願ありて七日の間参詣するとの事殊勝
さいとしく思ひけるに、或日大雨降りて車軸のごとく、特に暗
夜にて一寸先のみわぬ程なれば、姉の云ひけるは今宵は闇夜
且つ雨も多分に降りければ、道も泥路で危く、山坂の険阻を行
て若しや怪我でもした時は母上の歎きもいか計り、明けて晴れ
なばまいるべし、只止め玉へと留れども、今宵は七日の満願な

れば、母上の病氣又姉様の事を毘沙門様に願ひれいて、いかで
か偽りの申さるべきと、大雨を厭はず其夜十時過る頃より、一
里餘りもある峠の毘沙門堂へ簑笠きて行きけるが、さて怪しや
毘沙門堂の内は赫々として火の影の輝きければ、最不審に思ひ
様子を伺ひみれば、四五人の盗賊共、雨に濡れたる着物を焚火
にて乾しかわかし居たりしが、娘は賊とも夢更知らず、旅人の
雨宿りせしと思ひ、内に入んとすれば其物音に打驚きつゝ、目
を止めて表の方を見やれば、十歳計りの娘一人、簑笠かつきて
くれは、雨夜の暗きに只一人、爰に來るは定めし連れに遅れし
やと問へば、連れはなしと答ふ、又何處へ行くぞと尋れば、此

本尊毘沙門様に心願ありて、今夜は滿願なれば來たと答ふ、賊共の思ふには、まだ年端も行かぬ者なれば、色に惑溺し願ひにも有まじ、不審な事やと互に顔を見合はせ、何處より來れるか如何なる祈願ありしにやと尋ぬるに、娘は暫く物も得言はず居たりしが、強て尋ね問にぞ、泣々答ふるに、妾は此麓の村里の者にて有りけるが、母親を姉と二人にて養育しけるに、去る程より母は眼病を疾み玉ひ、父の死後より田畑も賣りて、今は只其日を送る家産もあらねば、姉は京都へ身を賣て、母の眼病の藥の價ひやら、生活の足しにもせばやと申しつれども、姉に別るゝことのイト悲しくて賴み人のあらざれば、神佛より外に依

怙も無く、此本堂の毘沙門様に七夜參りの願をかけ、願の叶はぬことなれば命を召されて給はれと祈り申すと潛然と泣きければ、惡黨の者共もあきれて互に顔見合せ涙を拭ひつゝ、さては孝心なる娘かな、よくこそ母を大事に思ひ姉を大事にしつるぞ賊共は我身の上を恥づる心起り、惡に強ければ善につよし、惡心轉して善心萌し、座に憐を催し、盗み來りし金五圓と風呂敷に包みし衣服を娘に與へ、是を以て母を養ひ眼病の療治を致すべし、我等は旅の商人なり、不憫に思ひ使はすと、簑笠着せて歸しける、娘は彼の金と衣服とを押し戴き、其恵みを受けて我家に歸り、其金を以て療治をすれば、母の眼病は頓て全快し、

近傍の者も娘両人の孝行なる事を聞き傳へ、皆々感心せぬものもなく、遂に能き聟を迎へ、積善の家には餘慶ありと云ふ道理にて、次第に家も榮へて、丹波丹後に音に聞ゑし豪家となりたとある。さて其四五人の賊共も、娘の孝行を我心に感じ、今迄の悪念を懺悔して、それ〳〵正業に基きて家を興し、大善人となりたと、雲萍雜誌ど云ふ書物の中に記してある、徳孤ならず必ず隣あり。で、娘両人の孝心より、母の病氣も全快し、悪黨の賊にまで改過遷善の曙光に接せしむる事を得たのであります、

贊題

一　聞法の心得

一　他に從ひて聽く時には、十六事を具せよ、

一には、時を以て聽け、

二には、聽かんことを樂へ、

三には、至心に聽け、

四には、恭敬して聽け、

五には、過を求めずして聽け、
六には、論議の爲めに聽かざれ、
七には、勝らんが爲めに聽かざれ、
八には、聽く時に說者を輕んぜざれ、
九には、聽く時に法を輕んぜざれ、
十には、聽く時に終に自ら輕んぜざれ、
十一には、聽く時に五蓋を遠離せよ、
十二には、聽く時に受持讀誦の爲めにせよ、
十三には、聽く時に五欲を除かん爲めにせよ、
十四には、聽く時に信心を具せんが爲めにせよ、
十五には、聽く時に衆生を調へんが爲めにせよ、
十六には、聽く時に闇根を斷んが爲めにせよ、（優婆塞戒經）

二

若し樂みて法を聞きて、厭足ることなければ、不可思議の法を悟る、

（華嚴經）

三

法を聞く者は說法の人に對して醫王の想を作せ、拔苦の想を作せ、說き玉へる法をば、甘露の想を作せ、醍醐の想を作せ、法を說く者は、勝解を增長せしむる想を作せ、病を癒やす想を作せ、若し說者と聽者と能く是の如く意を用ゆれば、皆佛法を

紹隆するに堪へ常に佛の前に生せん、

四

それ道を學ぶ者は猶水中の木の流れを尋ねて行くが如し、両岸に觸れず、人の爲めに取られず、鬼神の爲めに遮られず、洄流の爲めに住められず、亦腐敗せざれば、我れ此度決定して海に入ることを保せん、學道の人、情慾の爲めに惑はされず、衆邪の爲めに亂されず、精進無爲なれば、我れこの人必ず得道することを保せん、

五

疑多き者は一切世間出世間の事皆成ずること能はず、法を疑へば學得べからず、師を疑へば彼に敬ひ順ふ能はず、自ら疑へばこれ學の時にあらず、この三疑を生ずるは、是れ道を障ふる根本なり、決定心を起して學ばんものは、須らく此三事を疑ふべからず、

六

有人渴して水を欲し、之を覓めて大澤に至る、既に至り終りて對視して飲まず、傍人語りて曰く、汝水に渴して水を求め辛苦して茲に至り、今水を覓め得てこれを飲まざるは何故ぞや、彼答て曰く、若し飲み盡し得べくんば之を飲まん、然るに此水極めて多くして盡す能はず、この故に我れ飲まざるなりと、衆

人聞き了りて大に嗤ふ、人佛の教を見て之を解し能はずとなし之を聞かず、之を思はず、之を修せざるも、亦斯の如し、

（盲喩經）

七

聞くを羞ぢて問はずんば、後に羞を來すべく、生死を畏れず して放逸にすぎなば、後に畏れを來すべし、羞ぢざれば羞ぢ・羞づれば羞ぢず、畏れずは畏れ畏るれば畏れず、（出曜一經）

八

至りて堅きは石なり、至りて柔かなるは水なり、水能く石を穿つ、心源もし徹しなば菩提の覺道何事か成せざらんやと云へる古き詞あり、御慈悲にて候間、聽聞心に入れて申せば、信は得らるべきなり、

（運如上人）

二　熟誠を捧げて法を求めよ

一

富と両親と親戚と肉身との快樂よりも、遙かに大なるものは眞理なり、故に是等を放棄て、眞理に從ふべし、（巴利文雜阿含經）

二

若し佛法の一句の頌を聞て、歡喜踴躍するは、三千大千世界の中に充滿せる大珍寶珠を得るよりも勝れたり、一句の法能く正等覺を引き、能く菩薩の行を清むるを以てなり、（瑜迦論）

三

人あり、水を求めんと欲して高原を穿掘するに、功を用ふること數々なれども、但乾燥せる土を見るのみ、故に水は猶遠し と爲し、努めて之を堀るに尙土乾けり、堀ること久ふして、漸く濕れる土を見るに至り、水に近きたることを喜ぶ、それ此經を聞かず、修行の數々せざるものは、道を離るゝこと遠く、佛の智慧を去ること甚し、還て此經を聽き義を思惟するものは則ち道に近き人なり、

（正法華經）

四

設ひ大火の三千大千世界に充滿することあるとも、要らず當

に此を過ぎて此經法を聞き、歡喜信樂し、受持讀誦して如說に修行すべし、

（無量壽經）

五

たとひ大千世界に、てみらん火をも過ぎゆきて、佛の御名を聞く人は、ながく不退にかなふなり、

（親鸞聖人）

三　徒らに多く聞くも益なし

一

但多く聞を以て、よく如來の法に入るにあらず、人の美饌を設けながら、自ら餓にて食せざるが如し、人の藥を能くするも自の病を救ふ能はざるが如し、人の寶を數へて、自らは半錢

の分なきが如し、王宮に生れて、而して餒と寒とを受くるが如し、鼓の音樂を奏し他を悅ばしめ、自ら聞かざるが如し、盲の衆像を繪て他に示して自ら見ざるが如し、法に於て修行せずして、多く聞くも亦是の如し、

（華嚴經）

二

寧ろ當に少しく聞いて能く義味をば解すべし、多く聞て義に於て了せざることを願はざれ、心の師となることを願ひ、心を師とせざれ、

（涅槃經）

三

佛法は行を貴ぶ、不行を貴ばず、但能く勤行せば、たとひ寡聞なるも、亦先ちて道に入る、

（智度論）

四

若し佛語を聞けば卽ち能く自ら解せよ、丈夫の如きは能く苦味を服す、小兒は卽ち蜜を以て和す、

（十住毘婆論）

四　聞かば直に實行すべし

一

多聞ありと雖とも若し修行せざれば不聞と等し、人食を說くも終に飽くこと能はざるが如し、

（楞嚴經）

二

法を持つ者は多く誦習せず、若し少しにても聞く所あらば法

身の行を具足す、是を以て法を持つの人は、法を以て自ら將養すと謂ふ、多く誦して義を習ふと雖とも、放逸にして正に從はざるは、牧の他牛を數ふるが如し、これ沙門の正道にあらず、

（出曜經）

三

夫れ道を行ずるは、牛の重きを負ひて遠き泥の中を行くが如し、極めて疲勞するも敢て左右を顧みずんば、淤泥を離れ出で、蘇息するを得べし、人の情慾は彼の淤泥よりも甚し、故に直き心を以て、道を念じ衆苦を免かれよ、

（四十二章經）

五　聞法の得益

一

法を聞く功德は、生死の中を出るに最も第一たり、

（正法念處經）

二

牛水を飲めば乳となり、蛇水を飲めば毒となる、智者學者學べは菩提を成じ、愚者學べば生死を成ず、是の如く了智せざるは小學の過による、是の故に人多く聞て厭足すること勿れ、

（華嚴經）

三

今佛慈愍して大道を顯示し玉ふ、耳目開明して長く度脱を得

る、佛の所說を聞て歡喜せざるなし、

（無量壽經）

四

經釋すでに聞を以て詮要とせられたり、よく聞く處にて往生の心行を獲得する條顯然なり、しるべし、

（最要鈔）

六　信仰の必要

一

人の手ありて寶の山の中に入りて、自在に寶を取るが如く、佛法の中に入りて、自在に無漏の寶財を取る、

（華嚴論）

二

人の手なければ、寶の山に至ると雖とも、終に所得なきが如く、信の手なき者は、三寶に逢ふと雖とも所得なし、

（心地觀經）

三

佛法の大海には信を以て能入とす、

（智度論）

四

佛法の海に入るには信を根本とし、生死の河を渡るには戒を船筏と爲す、

（心地觀經）

五

國王の邊城に樓櫓を造り、地を築き、堅くして毀壞る能はざらしむるは、內國家を安穩にし、外怨敵を制せんが爲なるが如

く、佛子堅固に如來を信ずれば、信の根已に立ち、終に他の沙門梵志惡魔及び惡世間に隨はず、是を城樓を得たりと謂ひ、佛子の惡不善を除き、諸善を修するの法と爲す、

（中阿含經）

七　信仰と智識

一

信ありて解なければ無明を增長し、解ありて信なければ邪見を增長す、信と解と圓通して、方に行の本となる、

（涅槃經）

二

涅槃に至らん爲めに聖なる敎を信じつゝ、聞くを求めて智惠を得、不放逸にして通達す、かくして此世より最上界に入りて憂なし、

（巴利文增一阿含經）

三

世尊が法を說き玉ひしまゝに、其法の中にて一法を智了し、次いで諸法に通達して、世尊は完全なる覺者なりと安立す、何れの人も其信を斯くの如く堅實に、斯くの如く進行せしめて、如來の中に固定し、根本を確立したる人は、堅實なる信者　知見を基とせる人、有力なる人と稱せらる、

（巴利文中阿含經）

四

常住の理を信ずるを名ける信心と曰ふ、

（楞嚴經）

八　信仰と聞法

一　正法を聽くに因あり、謂く善友に近くなり、善友に近くに因あり、謂く信心なり、信心を起すに二因あり、謂く法を聽くと義を思惟するとなり、

（涅槃經）

二　信心は法を聽くを因とし、法を聞くは信心を因とす、

（同　上）

三　如來の勝れたる智慧は虛空に偏く、說き玉ふ言は唯佛のみ悟り玉へり、是の故に博く法を聞て、我敎の眞實なることを信ずべし、人界の身を得ること甚だ難く、如來の敎に遇ふことも亦難し、この故に法を聞く者は應に精進せよ、

（無量壽如來會）

九　信仰の種別

一　信に復二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず、是人の信心、聞より生じて思より生ぜざれば、名けて信不具足と爲す、復二種あり、一には道ありと信ず、二には得者を信ず、是人の信心、唯道ありと信じて、都て得道の人ありと信ぜざれば、名けて信不具足となす、

（涅槃經）

二

信心を説くに四種あり、

一には、根本を信ず、所謂眞如を樂念するなり、

二には、佛に無量の功德ありと信じ、常に念じて親近し、供養し、恭敬し、善根を起して、一切智を願ひ求む、

三には、法に大利益ありと信じ、常に念じて波羅密を修行す、

四には、僧能く自利々他を修行すと信じて、常に樂んで諸の菩薩衆に親近して、如實の行を求め學ぶ、

一〇 信仰は成佛の因なり

（起信論）

一

他方佛國の諸有衆生、無量壽如來の名號をきゝて、能く一念の淨信を起して、所有の善根を廻向し玉へるを歡喜愛樂して、無量壽國に生れんと願へば、願に隨ひて皆生れ、不退轉乃至無上正等菩提を得ん、

（無量壽如來會）

二

若し衆生ありて、明かに佛智乃至勝智を信じ、諸の功德を作し、信心廻向すれば、この諸の衆生は、七寶華中に於て自然に化生し、跏趺して座し、須臾の頃に身相光明智慧功德、諸の菩薩の如く具足し成就す、

（無量壽經）

三

信心を種子とし、苦行を時雨と爲す、

（雜阿含經）

四

阿耨多羅三藐三菩提を說きて、信心を因と爲す、これ菩提の因復無量なりと雖とも、若し信心を說けば、卽ち已に攝盡す、

（涅槃經）

五

菩提心は則ち大道たり、能く一切智の城に入ることを得せしむるが故なり、

菩提心は卽ち淨眼たり、悉く能く邪正の道を覩見するが故なり、

菩提心は則ち明月たり、諸の白淨の法悉く圓滿するが故なり、

菩提心は則ち淨水たり、一切の煩惱の垢を洗濯するが故なり、

菩提心は卽ち良田たり、衆生の白淨の法を長養するが故なり、

菩提心は卽ち一切諸佛の種子たり、能く一切の諸の佛法を生ずるが故なり、

（華嚴經）

六

大信心は卽ち是れ佛性なり、

佛性は卽ち是れ如來なり、

（涅槃經）

七

菩提清涼の月は、畢竟空に遊ぶ、
衆生の心水淨ければ、菩提の影中に現ず、

（華嚴經）

八

大信心は卽ちこれ長生不死の神方、大涅槃を證するの眞因なり、

（教行證文類）

二　佛陀に對する信仰

一

佛は一切衆生の死の繩を脫する道を知り、親しく神と人とに知と法とを明示し玉ふ、此人を見、或は聞かんものは安き心を

得ん、實に佛は道の人、決定せる人、漏なき人　身命に窮達し大智慧ある大人なり、

（巴利文增一阿含經）

二

我は一瞬間と雖とも、智慮深く明晰に法を說き玉ひし佛の側を離れず、愛着なき、苦惱なき法を說き玉ひし佛は他に比類なき處なり、我は晝と夜との別なく、心と眼とに彼を見奉る、我は彼に歸依しつゝ、夜を過し須臾も彼を離れずと信ず、我が信と悅びと心と念とは、我をして佛の敎に歸せしむ、

（巴利文增一阿含經）

三

一心に佛を見奉らんと欲して、自ら身命を惜まざれば、我及び衆僧　俱に靈鷲山に出でん、

（法華經）

四

佛言はく、若し菩薩ありて、勝れたる意樂を以て我所に於て、父の想を起さん、彼の人當に如來の數に入ることを得て、我の如くにして異なることなかるべし。

（寶積經）

一二　信仰の諸德

一

信は道の元と爲す功德の母なり、一切の諸〳〵の善法を長養す疑網を斷除して愛流を出て、涅槃無上道を開示せしむ、信は垢濁の心なし、清淨にして憍慢を滅除す、恭敬の根本なり、亦法藏第一の財と爲す、清淨の手となりて衆行を受く、信は能く惠施して心に悋むことなし、信は能く歡喜して佛法に入る、信は能く智功德を增長す、信は能く必ず如來地に至る、信は諸根をして明淨利ならしむ、信の力は堅固にして能く壞るものなし信は能く煩惱の本を滅す、信は能く專ら佛の功德に向はしむ、信は境界に於て所著なし、諸難を遠離して無難を得せしむ、信は能く衆魔の道を超出して、無上の解脫道を示現せしむ、信は功德の種を壞らず、信は能く菩提樹を生長す、信は能く最勝智を增益す、信は能く一切佛を示現せしむ、

（華嚴經）

二

一切の行は信を以て首と爲す、衆德の根本なり、（梵網經）

三

一切の諸の功德は、信を以て使命と爲す、諸の寶の中に於て、信の財を最第一と爲す、（大莊嚴經）

四

菩薩生死に於て最初に發心する時、一向に菩提を求むること堅固にして動かすべからざれば、彼の一念の功德深廣にして涯際なし、如來分別して說き、劫を窮めんも盡すこと能はず、（華嚴經）

五

彼の最上の大福聚の如きは道心の十六分にも及ばず、若し福を求めんが爲めに、恒河沙の如き諸の佛刹に、皆悉く寺を造り、諸の塔を造ること須彌の如くせんも、道分の十六分にも及ばず、（出生菩提心經）

六

若し人善根を植へて疑へば則ち華開けず、信心淸淨なるものは、華開いて卽ち佛を見奉る、現に十方に在す諸佛は、種々の因緣を以て彼の佛の功德を歎じ玉ふ、（十住毘婆沙論）

七

金剛の眞心を獲得するものは、横に五趣八難の道を超へ、必ず現世に十種の益を獲る、何ものをか十とする、一には冥衆護持の益、二には至德具足の益、三には轉惡成善の益　四には諸佛護念の益　五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には智恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり、

（教行證文類）

一三　法を信ずる功德

一　若し一句未曾聞の法を聞きて、大歡喜を生ずれば、三千大千世界の中に滿つる珍寶を得るに勝れり、

（華嚴經）

二　佛、彌勒に語り玉はく、彼佛の名號を聞きて歡喜踊躍し乃至一念せん、當に知るべし、此人は大利を得と爲すことを、則ち是れ無上の功德を具足せるなり、

（無量壽經）

三　法を聞きて能く忘れず、見て敬ひ大慶喜を得れば、則ち我が善親友なり、

（同　上）

四　譬へば、閻浮檀金は如意寶を除けば、一切の寶に勝るゝが如く、菩提心の閻浮檀金も亦復斯くの如し、一切智を除けば、諸

の功德に勝る、

（華嚴經）

五

譬へば迦楞毘伽鳥は、殼の中にある時ですら、大勢力ありて餘の鳥の及ばざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、生死の殼に於て菩提心を起せば、功德勢力は聲聞緣覺の及ぶ能はざるところなり、

（同　上）

六

我等の感情、怒、怠、及び疑の心より生ぜる總てのものは永續すべからず、唯離欲慈愛安穩の心より生ぜるもの、及び佛の眞敎を信奉する誠より生せる者は永劫滅びざるなり、

（巴利文小阿含經）

七

此法を聞て信心し、歡喜して疑なき者は、速に無上道を成じ、諸の如來と等しからん、

（華嚴經）

一四　信を得るの障碍

一

淨心の水器には影顯はれざることなし、常に前に現在す、但破器濁心の衆生は、如來法身の影像を見ず、

（華嚴經）

二

憍慢と弊と懈怠とは、以て此法を信じ難し、

宿世に諸佛を見し者は、是の如きの敎を樂聽す、（無量壽經）

三

若し信解して憍慢を離れたるものは、心を發して如來を見奉る事を得、若し諂曲不淨の心あらば、億劫尋ね求むるも値遇し奉ること難し、

（華嚴經）

四

戒行の器缺くれば、觀法の水漏れ易く、邪見の地乾けば、佛性の種生じ難し、

（弘法大師）

一五　佛敎とは何ぞや

一

諸の惡は作すこと莫く、衆の善は奉行せよ、自ら其意を淨くせよ、是れ諸佛の敎なり、

（涅槃經）

二

怨恨なき敎を佛敎と爲し、諍訟なき敎を佛敎と爲し、誹謗なき敎を佛敎と爲す、

（寶藏經）

三

自他を執せざる法、これを佛敎と名け、譏訶なき法、これを佛敎と名け、善く敎へ善く導きて宜しきに隨ふ法、これを佛敎と名く、

（寶筐經）

一六　出世本懷

一

如來無蓋の大悲を以て三界を哀愍み玉ふ、世に出興し玉ふ所以は、道教を光闡して群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり、無量劫にも値ひ難く見奉り難し、猶靈瑞華の時々に乃ち出つるが如し、

(無量壽經)

二

佛言はく、我れ世に出現すること猶大雲の一切を潤すが如く枯渴の衆生をして皆苦を離れしめ、安穩の樂を得せしめんが爲めなり、世能く我に及ぶものなし、大衆の爲めに甘露の淨法を說くに、其法一味にして、唯解脫涅槃にあり、

(法華經)

三

諸佛は唯此事のみあり、曰く、一切世間を利し、世間の眼を淨くし、一切の非道を斷たんが爲めに出現せり、

(大法炬陀羅尼經)

四

佛言はく、我れ汝等諸天人民を哀愍すること、父母の子を念ふよりも甚し、今我れ此世間に於て、佛となりて、五惡を降化し、五痛を消除し、五燒を絕滅し、善を以て惡を改め、生死の苦を拔き、五德を獲て無爲の安きに昇らしむ、

(無量壽經)

五

如來世に興出し玉ふ所以は、唯、彌陀の本願海を說かんとなり
五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信ずべし、

（正信偈）

一七　懺悔を勸む

一

人衆の過ちあり、自ら悔て頓に其心を息めずんば、罪來りて身に趣くこと、水の海に歸して漸く深廣となるがごとし、若し人過ありて、自ら解りて非を知り惡を改め善を行はゞ、罪自ら消滅すること、病の汗を得て漸く痊損するが如くならん、

（四十二章經）

二

極惡の行を作すも過を悔ゆれば、轉た微薄なり、日に悔て懈怠なくんば、罪根永く拔くべし、

（增一阿含經）

三

百年の垢衣も一日に於て洗ひて鮮淨ならしむべきが如し、是の如く百千劫の中に集むる所の諸の不善の業　佛法の力を以ての故に、善く順ひて思惟せば、一日一時に於て盡く能く消滅すべし、

（大集經）

四

過ちて非惡を犯さば、能く追悔するを善とす、この明、世間

を照すこと、日の曇りなきが如し、

三〇八　（法句經）

五

前心惡を作ること、雲の日を覆ふが如く、後心善を起すこと
炬の暗を消すが如し、

一八　懺悔滅罪　（未曾有經）

一

一切業障の海、
若し懺悔せんと欲せば、
衆罪は草露のごとく、

二

皆妄想より生ず、
端座して實相を念ぜよ、
悉日能く消除す、　（觀普賢經）

若し能く如法に懺悔すれば、所有煩惱ことゝく皆除くこと
猶劫火の世間を壞りて須彌及び大海を燒き盡すが如けん、

懺悔は能く煩惱の薪を燒き、
懺悔は能く天路に往生す、
懺悔は能く四禪の樂みを得、
懺悔は能く寶摩尼珠を雨らし、
懺悔は能く金剛壽を延ばし、
懺悔は能く常樂の宮に入り、
懺悔は能く菩提の華を開き、
懺悔は能く佛の大圓鏡智を得、

懺悔は能く寶所に至る、

（心地觀經）

三

懺悔せんと欲すれば、廣く諸佛を請ひ招きて經を誦じ、至心徹倒して願を發し、身心一切の惡業を破壞せんことを願ひ求めよ、念々の中に諸の罪消滅することを得ん、

（觀普賢經）

四

我昔造る所の諸の惡業は、皆無始の貪瞋痴による、身語意より生ずる所の罪、一切我今皆懺悔す、

（華嚴經）

五

惡ありて非を知り、過を改めて善を得ば、罪日に消滅して後必ず道を得るなり、

（四十二章經）

六

若し人重罪を造り、作り已りて深く自ら責め、懺悔して更に造らざれば、能く根本の業を拔く、

（業報差別經）

七

佛に對ひて僭を作すは、盲人の自ら見ざるを以て、人も已れが惡事を作せるを見ざるべしと思ふに同じ、故に佛前に於て大衆に懺悔せよ、罪はもと自性なきが故に、善緣に從へば必ず滅せん、

（涅槃經）

一九　少善少惡

一

小惡を輕じて以て殃なしと爲すことなかれ、水滴微なりと雖とも漸く大器に盈つ、　（涅槃經）

二

耆婆曰く、臣佛說を聞くに、一善を修する心は百種の惡を破る、大王、少金剛の能く須彌を破るごとく、又少火の能く一切を燒くが如く、少毒藥の能く衆生を害するが如く、少善も亦然り、少善と名くと雖とも、其實是れ大なり、何を以ての故に、大惡を破るが故に、　（同上）

三

心を端くし行を正くして齋戒清淨なること、一日一夜するは無量壽國に在りて善を爲すこと百歲なるに勝る、所以は何となれは、他方の佛國には善を爲す者は多くして惡を爲す者は少し福德自然にして惡を造るの地なければなり、　（無量壽經）

二〇　日常の戒め

一

煩惱の過を知り、煩惱に隨はず、能く惡苦を忍び、恐怖の心を生せず、此四法を具ふるものは惡を作さず、善法を樂みて修め、善と惡とを分別し、正法に親しみ、衆生を憐愍み、宿命を知る、此五を具ふる者は動かされず、

若し人の譏るを聞ては心に忍べよ、若し讃むるを聞きては心に愧ぢよ、道を行ひて自ら慢るなかれ、人の離るゝを見ては和合せしめよ、人の善を揚げて咎を隱せ、人の耻づることは說くこと勿れ、煩惱に於ては怨想を生じ、善法に於ては親想を生せよ、父母師長を供養すと雖とも、此が爲めに惡事を作さざれ、

（優婆塞戒經）

二

佛、舍利弗に告げ給はく、菩薩は一切の處に於て、寧ろ身を失ふとも、種々の邪欲の行を遠離し、又妄語と兩舌とを遠離し又綺語と瞋恚と邪見とを遠離して、常に潔白なる勝行を成就す、

（菩薩正法經）

二一　已れに克て

一

佛言く、人は常に目の爲めに欺かれ、耳の爲めに欺かれ、鼻の爲めに欺かれ、口の爲めに欺かれ、身の爲めに欺かる、

（阿含正行經）

二

六を藏すること龜の如く、意を防ぐこと城の如くせよ、慧魔と戰ひて、勝ては則ち患なし、

（法句經）

三

五根は心を其主と爲す、是の故に汝等當に好く心を制すべし
心の畏るべきことは、毒蛇惡龍盜賊大火よりも甚し、
（遺教經）

四

心の師と作るを願ひて、心を師とせざれ、
（涅槃經）

五

佛、沙門に告げての給はく、愼みて汝が意を信ずる勿れ、意
は遂に制すべからず、
（四十二章經）

六

此身の動作は皆心に由りて起る、故に應に先づ心を調ぶべし
身を苦むること勿れ、身は木石の如く知る處なし、何が故に心
に隨ひて體を苦むるや、
（佛本行經）

七

百の佛寺を作るは一人を活すに如かず、十方天下の人を活す
は意を守ること一日なるに如かず、
（罵意經）

八

宜しく自ら決斷して身を端くし行を正くし、益〻諸善を作
して已を修め體を潔くし心垢を洗除し、言行を忠信にして表裡
相應し、能く自ら度し、轉相極濟して、精明に求め願ひて、善
本を積累すべし、
（無量壽經）

九

汝が目を端くせよ、　汝が耳を端くせよ、
汝が鼻を端くせよ、　汝が口を端くせよ、
汝が身を端くせよ、　汝が意を端くせよ、　（正行經）

一〇

喩へば軍征の如し、百萬の衆名將をたのみて以て敵を却く、
道人、心を伏し意を制し法を修め道を奉じ、戒禁に順ひ、身意
清白にして、恩を布き德を施し、忿怒憍奢諍訟を除き棄てゝ、
專精に道を行ふは、名將の衆を帥ふるが如し、　（四自浸經）

一一

一心に意を制し身を端くし行を正くして、獨り諸善を作し
衆惡を作さざれば、身獨り度脫して其福德を獲ん、
（無量壽經）

一二

衆人の中に座して衆人に耻ぢず、人の敬ふ處となるは、心淨
端なるが故なり、　（正行經）

一三

わが心に任せすして心を責めよ、佛法はきのつまるものかと
思へは、信心に御なくさみ候、　（蓮如上人）

二二　心の垢を去れ

一

心性は本淨し、諸過を垢と爲す、智慧の水を以て、心垢を洗除せよ、

（文殊師利問經）

二

人、鐵を鍛ひ滓を去りて器と爲せば、器卽ち精し、好く道を學ぶ人、心の垢染を去れば、行卽ち淸淨なり、

（四十二章經）

三

惡の心より生じて、反りて以て心を損ふは、鐵の垢を生じて其形を消毀するが如し、

（孝經）

四

人、漸を以て安徐に精進して心垢を洗除すること、工匠の金を錬ふが如くせよ、惡は心より生じて却りて自ら身を壞る、鐵の垢を生じて、反りて其形を蝕ふが如し、

（法句經）

五

自ら身を觀て他人の身を觀よ、自ら意を觀て他人の意を觀よ自ら法を觀て他人の法を觀よ、

（忠心經）

二三　言語を愼め

一

佛言はく、諸〻の弟子よ、無義の語を離れ、常に自ら言語す

べき所を守護し、語に時を知り、語は法に順ひ、語は以て人を利益するものゝ外、戯笑にだも爲さざれ、

（華嚴經）

二

妄りに人を證して罪法に入らしむることを得るなかれ、人の惡言を傳ふることを得るなかれ、轉た言語を相鬪はし、人の意を中傷することを得るなかれ、聞かずして聞たりと云ふなかれ見ずして見たりと云ふなかれ、

（阿含正行經）

三

實語の者は、布施持戒學問多聞をからず、但實語を修めて無量の福を得る、

（智度論）

四

寶女童子佛に問ひ奉て曰く、實語とは何ぞや、答へて曰く語を多くせず、語を守護り、麁さ語を用いず、これを實語と云ふ、

（大集經）

二四　妄語の害

一

妄語の言說は一切衆生を惱ます、彼常に黑暗の如し、命あれども死せるに同じ、

（正法念處經）

二

妄語に十罪あり、

一には、口氣臭し、
二には、善神之を遠け非人便を得、
三には、實の語ありとも人信受せず、
四には、智人の謀議に常に參與せず、
五には、常に誹謗を被り醜惡の聲周く天下に聞ゆ、
六には、人に敬はれず、事ありて敎勅すと雖とも人承け用ゐず、
七には、常に憂愁多し、
八には、誹謗の業因緣を種ゆ、
九には、身壞れ命終れば當に地獄に墮つべし、

十には、出てゝもし人となるも常に誹謗を蒙る、

（智度論）

三

弟子よ、妄語を離れ、常に言を眞實にし、語を諦かにして、夢にだも妄語せざれ、

（華嚴經）

二五　惡口の害

一

人の世間に生るゝ、禍口より出づ、當に口を護るべし、猛火よりも甚し、猛火の熾然たるは世間の財を燒く、惡口の熾然たるは七聖の財を燒く、一切衆生の禍は口より出づ、故に口

は身を破るの斧、身を滅すの刃なり、

（報恩經）

二

それ士の生るゝや、斧口中にあり、身を斬る所以は其惡言に由る、

（法句經）

三

惡を譽むると、惡に譽めらるゝと、是二俱に惡とす、好んで口噲を以て鬪はゞ、これ後皆安きことなし、

（同上）

四

惡口し両舌し好んで他人の過ちを出だす、是の如き不善人は惡として造らずと云ふことなし、

（華手經）

五

佛言く、言語する者は他人之を畏る、両舌を其第一と爲す、両舌を離るゝ人は、現在の世に於て、善き果報を受く、知識親友兄弟妻子奴婢等の親和、皆悉く堅固にして人能く壞ることなし、

（正法念處經）

二六　能く忍べ

一

世尊言はく、寧ろ利劒を以て腹を貫き肌を截り、自ら火中に投ずるも、愼んで惡を履むことなかれ、寧ろ須彌を戴き迫りて其命を毀り、巨海に投じて魚鼈に呑まるゝも、愼んで惡を作す

ことなかれ、

二

菩薩は百千劫の間罵詈せらるゝとも瞋心を生ぜず、又百千劫の間稱讃せらるゝも亦歡喜せず、これ人の言は音聲の生滅にして、夢の如く響の如くなることを了知すればなり、

（智度論）

三

忍に十事あり、

一には、我及び我所の相を觀ず、

二には、種姓を念ぜず、

（忍辱經）

三には、憍慢を破除す、

四には、惡來るも報ひず、

五には、無常の相を觀ず、

六には、慈悲を修す、

七には、心放逸ならず、

八には、饑渴苦樂等の事を捨つ、

九には、瞋恚を斷除す、

十には、智慧を修習す、

若し人能く是の如く十事を成せば、當に知るべし、この人能く忍を修することを、

（寶積經）

四

もし諸〻の衆生、我身を伐りて、手足頭目肢節を斬截せば、當に此人に於て大慈悲を生じて自ら喜慶すべし、是の如きの諸人、我が爲めに菩提の因緣を增長す、

（涅槃經）

五

若し諍を以て諍を止めんと欲すれば、至竟止むることを得ず唯忍能く諍を止む、是法眞に尊貴なり、

（雜法集要經）

二七　忍耐の功德

一

忍の德たる持戒苦行も及ぶ能はざる所なり、能く忍を行ふ者は、乃ち名けて有力の大人と爲す、

（遺教經）

二

忍耐は多力なり、惡を抱かざるが故に、兼て安健を加ふ、忍者惡なし、必ず人の爲めに尊ばる、

（四十二章經）

三

若菩薩ありて、慈忍に住すれば十種の利益あり、何等をか十と爲す、

一には、火も燒くこと能はず、

二には、刀も割くこと能はず、

三には、毒も中ること能はず、

四には、水も漂はすこと能はず、
五には、鬼神の爲めに護らる、
六には、身相莊嚴を得、
七には、諸の惡道を閉つ、
八には、其所樂に隨ひて梵天に生ず、
九には、晝夜常に安し、
十には、其身喜樂を離れず、

（月燈三昧經）

二八　勤勉

一

汝等比丘、若し勤めて精進せば則ち難きことなし、汝等比丘

當に勤めて精進すべし、譬へば小水常に流るゝ時は、則ちよく石を穿つが如し、

（遺教經）

二

佛弟子薄俱羅曰く、我出家してより以來八十年の中、未だ嘗て偃臥し、脇を牀につけて、背を倚せしことあらず、

（薄俱羅經）

三

菩薩は衆行を修めて怠ることなく、勇猛の勢力能く制伏するものなく、能く一切の智門を滿足す、

（華嚴經）

二九　怠惰の過

一

夫れ放逸はこれ衆悪の本なり、不放逸は乃ちこれ衆悪の源なり、

涅槃經

二

放逸の過は一切の過の中に最も最上たり。

正法念處經

三

愚者は放逸を樂み、常に諸〻の苦惱を受く、若し放逸を離るれは、則ち常安樂を得ん、一切諸〻の苦惱は放逸を根本と爲す是故に苦を離れんと欲すれば、應當に放逸を捨つべし、

正法念處經

四

夫れ懈怠は衆くの行の累なり、家にありて懈怠なれば衣食も供はらず、産業も擧らず、出家して懈怠なれば、生死の苦を出離すること能はず、

菩薩本行經

三〇　色欲は苦なり

一

色欲は世の伽なり、鎖なり、凡夫は戀着して自ら拔くこと能はず、色欲は世の重患なり、凡夫は困苦して死するまで免れず、色欲は世の禍なり、凡夫は之にあへば厄として受けざるものなし、

日明菩薩經

二

自の妻にて足れりとせず、好みて他の婦女を淫す、この人漸愧あることなく、苦を受けて常に樂なく、現世と未來世に苦の爲めに縛られん、

（尼乾子經）

三

淫は不淨の行なり、迷惑して正道を失し、命を傷ひて早く死し、罪を受けて痴頑となり、死して又惡道に墮す、此故に敢て淫を亂すなかれ、

（八師經）

三一　漸と愧

一

漸愧の水を以て諸の塵勞を洗へば、身心共に清淨の器となる、

（心地觀經）

二

世に二の妙法ありて世間を擁護す、所謂漸と愧となり、若しこの二法なくんば、世間父子兄弟妻子知識尊長大小を別たず、則ち畜類と同等なり、

（增一阿含經）

三

漸愧は衆善の衣服なり、

（大雲經）

四

漸愧の服は諸の莊嚴に於て最第一とす、漸は鐵鉤の如し

能く人の非法を制す、是故に比丘常に當に慚愧すべし、暫くも替ることを得るなかれ、若し慚愧を離るれば、則ち諸の功德を失ふ、愧ある人は則ち善法あり、もし愧なき者は諸の禽獸と相異ることなきなり、

（遺教經）

五

慚愧に四種あり、一には作すべからざるを爲して慚愧し、二には作すべきをなさずして慚愧し、三には心に自ら疑を生じて慚愧し、四には罪を覆藏して他の知らんことを恐れて慚愧すこれなり、

（善戒經）

三二 廉潔

一 寧ろ道を守りて貧賤に死すとも、無道をなして富貴にして生きざれ、

（六度集經）

二 多欲の人は利を求むること多きが故に、苦惱も亦多し、少欲の人は、求むることなく欲することなければ、則ち此患なし、

（遺教經）

三 若し人心厭足なければ、唯多く求めて罪惡を增長す、菩薩はしからず、常に知足を念じて、貧に安んじ道を守り、唯慧のみ

これ業なりと覺知す、

（八大人覺經）

四

それ富貴を求むる時甚だ苦み、既に得終りて守護するに亦苦しみ、後還りて之を失ひ憂ひて亦苦しむ、三時の中に於て都て樂あることなし、

（首楞經）

三三　酒と罪惡

一

飲酒は衆生を惱ます爲めの故に罪因となる　若し人酒を飲む時は、則ち不善の門を開きて、以て能く定及び諸の善法を害ふこと、衆菓を植ゑて牆障を作らざるが如し、

（成實論）

二

佛言はく、酒を飲むものは六種の失あり、一には財を失ふ、二には病を生ず、三には鬪ひ爭ふ、四には惡名流布す、五には恚怒暴かに生ず、六には智慧日に損す、

（長阿含經）

三

若し自ら酒器を手にして人に與へ、以て酒を飲ましむる者は五百生の中手なからん、何況んや自ら飲むれや、一切の人に飲むことを教へ、及び一切の衆生に酒を飲ましむることを得ず、況んや自ら酒を飲むをや、

（梵網經）

四

酒は不善諸惡の根本なり　若し能く是を除斷せば則ち衆の罪を遠く、

（涅槃經）

五

酒を飲むことを得ず、
酒を嗜むことを得ず、
酒を嘗むることを得ず、

（沙彌尼戒經）

三四　衛生

一

歩行に五德あり、一には能く走る、二には力あり、三には睡りを除く、四には飲食消し易くして病を作さず、五には行者となれば定意を得易く、既に定意を得れば久しきを爲す、

（七處三昧經）

二

諸の比丘よ、常に室内を洒掃すべし、室内に臭氣あらば香泥を塗れよ、若猶臭き時は室の四隅に香を懸くべし、

（四分律）

三

人身は四大の和合によりて成ず、四大とは地水火風なり、一大調はざれば、百一の病を登す、四大共に整はざれば、四百四病同時に倶に生ず、

（五悪經）

三五　報恩

一

恩を知るは大悲の本なり、善業を開くの初門なり、人に愛敬せられて名譽遠く聞ゑ、死して天に生ずることを得て、終に佛道を成ぜん、恩を知らざる者は畜生よりも甚し、（智度論）

二

佛、王舍城内の妙德長者、善法長者等に告げて曰く、長者よ我今妙義を説きて未來世の恩德を知らざるものを利益せん、世間出世間の恩に四種あり、

一には父母の恩、二には衆生の恩、

三には國王の恩、四には三寶の恩、

なり、此四恩は一切衆生平等に荷負せり、（心地觀經）

三

恩を知る者は生死にありと雖ども善根を壞らず、恩を知らざる者は善根斷滅す、この故に諸佛は恩を知りて德に報ゆる者を稱讃し玉ふ、（大方廣不思議境界經）

三六　主從

一

國に君なきは猶體に首なきが如し、以て久しく立ち難し、（自愛經）

二

王は父母の如くにて愛念差ふことなし、
國人は子の如くにて忠孝を幷び懷く、　（佛爲勝光天子說王法經）

三

王慈心を以て諸の人民を見ること既に子の如し、彼の一切の人民も亦復王に於て其父母の如し、　（勝軍王所問經）

四

長者の奴婢執事を見るに、力に適して之を使ひ、時に衣食を與へ、味を分ち、敎を垂れ、病めばこれ息ましむ、これ長者の五事なり、善く勤め、善く爲めに成し、受付審かに、遲く臥し早く起き、學び、作務に勤め、家貧なるも慢らず、空乏の時にも離れず、門を出ては長者を稱む　これ奴婢の十事なり、主と從と斯の如くなれば善事衰へず、　（善生子經）

三七　親子

一

若し世に佛なくんば善く父母に事へよ、父母に事ふるは、卽ち是れ佛に事ふるなり、　（大集經）

二

善の極は孝より大なるはなく、惡の極は不孝なり、　（忍辱經）

三

慈父悲母長養の恩によりて、一切男女如皆安樂なり、

慈父の恩高きこと山王の如く、
悲母の恩深きこと大海の如し、

（心地觀經）

四

飲食及寶は未だ能く父母の恩を報ずるに足らず、引導して正法に向はしむるを便ち二親に報ずと爲す、

（不思議光經）

五

若し父母無信なれば信心を起さしめ、若し無戒なれば禁戒に住せしめ、若し慳なれば惠施を行ぜしめ、若し智慧なき時は智慧を起さしむ、之能く是の如くして方に報恩と云ふべし、

（毘那耶律）

三八　師弟

一

能く學ばしめ、能く教へ、學に敏からしめ、善道に導き賢友に屬せしむるは、これ師の弟子に對する五事なり、

（善生子經）

二

聞を審かにし、學を愛し、事に敏く、過行なく、師を供養すこれ弟子の師を見る五事なり、

（同　上）

三

弟子師に從ひて行くに、足を以て師の影を踏むを得ず、

（沙彌威儀經）

四

師の恩を知る者は、師を見れば則ち承事し、見ざれば則ち敎誡を思惟す、孝子の父母を念ふが如く、人の飲食を念ふが如し

（中心經）

五

若し人、惡知識に親近せば現世には好き名聞を得ず、必ず惡友に相親近するを以て當來には又阿鼻獄に墮せん、若し人善知識に親近して彼等所業の行に隨順せば、現に世間の利を證せずと雖ども、未來當に苦因を盡くすを得べし、

（佛本行經）

三九　朋友

一

惡知識と愚者とには共に從ふ事なかれ、當に善知識と智者とに交るべし、人本惡なけれども若し惡人に親近せば、後に必ず惡人となりて惡名天下に遍し、善知識は之に反す、是故に當に親近すべし、

（增一阿含經）

二

惡人の賢を害ふは猶ほ天を仰いで唾はけば、唾天に至らずし